
COBALT-SERIES
前田珠子
空の呪縛
月の堕ちるとき
集英社

COBALT-SERIES

空(くう)の呪縛

月の堕ちるとき

前田珠子



集英社



COBALT-SERIES

空（くう）の呪縛

月の堕ちるとき

前田珠子

集英社

空の呪縛

月の堕ちるとき

目次

譲り葉の恋……7

月の堕ちるとき……75

あとがき……185


リアンリード
紫属第一位の柱神。フィオルシェーナの育ての親であり、生涯唯一の恋人。
ファナルシーズ
リアンリードの魂を持って、アストニア皇国の皇子として生を受ける。
オーランガーダ
黄緑属の柱神で、リアンリードの親友。前身は大帝国の皇女で、姐御気質。
空の呪縛
登場人物紹介


フィオルシェーナ
紫属第三位の柱神。人間だったころ、リアンリードに命を救われた。
エン・リュウ
精霊たちが「夏の一位」と呼ぶ蒼属の柱神。リアンリードの古い親友。

イラスト／明咲トウル

譲り葉の恋

プロローグ

その日、世界中の精霊が嘆き（なげ）の声を上げた。
風は悲しみを歌い、水は嘆きを響（ひび）かせ、炎は喪失（そうしつ）の痛みに叫び、大地は慟哭（どうこく）に身を震わせた。
世界中の精霊が嘆き、悲しんでいた。
それでも嵐は起きず、炎は地上を焼き尽くすことなく、大地が裂けることはなかった。
彼らが誰より愛するひとが、それを望まなかったからだ。
この世界を支える百八の御柱（みはしら）中、最も精霊たちに愛され、最も長く生きた存在――リアンリードが息を引き取ったその日――。
世界は沈黙に包まれた――。

◈　◈　◈

人間の世にあっては幻獣と呼ばれる風豹で、旧友の屋敷に駆けつけた蒼属の柱神エン・リュウは、地に足をつけると同時に、自分が間に合わなかったことを知った。

年上の友人の気配はすでになく、精霊たちの深い嘆きだけが肌に伝わってくる。

（リアンリード……！）

世界で最も美しく、最も精霊に愛され、最も長く生きた友人は、ついにその命を終えたのだ。

悲しみに胸が塞がれそうになるのを、頭を振ることで彼は押しとどめた。

その喪失を悲しむより先に、彼には為さねばならぬことがあったのだ。逝った友人がくれぐれもと頼んでいたことだ――何よりも優先すべきことだった。

胸の奥にぽっかりと穴が空いたような、喪失感とも虚脱感ともつかぬ感覚に、捕まらずにすんだのは、その誓いがあってのこと――亡き友人に感謝すべきなのか、それとも罵るべきなのか、判断に迷うところだった。

（なんにしろ、あなたが酷い方だということだけは確かだな）

苦い笑みが、エン・リュウの口元に浮かぶ。

それでも、恨むには、彼はリアンリードを愛しすぎていた。そして、この屋敷にただひとり、取り残されてしまった女性のことも。

ふたりとも、かけがえのない存在だった。

だからこそ、その片方の心が壊れるのを看過するわけにはいかない。

「フィオ！」

その女性の愛称を叫びながら、エン・リュウは屋敷に足を踏み入れた。

死の静寂に支配された屋敷のなか、彼が愛する親友の養い児にして恋人である女性の姿を見つけるのは簡単だった。

リアンリードの寝室――。

広すぎる寝台に横たわるのは、生命の息吹を止めてしまった柱神の亡骸。

千年以上もの間、髪一筋変わることのなかった美しい姿は、けれどそこには見いだせない。

艶やかな黒髪と、輝かしき紫水晶の双眸――その双方を引き立てるのは、彼の肌理の細かい白磁のような肌だった。

だが、今寝台に横たわる遺骸には、生前の姿を思わせるものはなにもない。

美しさも、若さも、神々しさも――あるのは、枯れ木のようにやせ衰えた老人のしなびた骸……。

その前で、呆然としている女性の姿を認め、エン・リュウはほっと息をついた。

（フィオ……）

フィオルシェーナ――処女雪を思わせる麗しき女性は、リアンリードの最後にして最愛の恋人だった。

柱神とは、千年もの時を生きる存在であるが、彼女はそうなって、まだ十数年に過ぎない。リアンリードによって人間から柱神に生まれ変わった時、十八だった彼女は、外見はその時のまま……まだ、人間の意識から抜け出せずにいることを、エン・リュウは知っていた。

そんな彼女の目の前で、柱神としての最期を見せることを、リアンリードが苦にしていたことも――。

だから、エン・リュウは声をかけたのだ。

「フィオ」

と――。

一度目では、彼女は振り向かなかった。

二度目でも、三度目でも。

近づき、その細い肩にエン・リュウが手を置いた時、ようやく気づいたかのように、ぼんやりとした顔で、彼を見上げてきた。

「……エン・リュウ……さま？」

感情を凍えさせた、その眼差しと声に、彼は一瞬ひやりとしたが、次の瞬間、彼女の瞳が涙で溢れるのを見て、再度ほっと安堵した。

最も危惧していた事態には陥っていないことを確信できたからだ。

「……少し、休みなさい」

エン・リュウの告げる言葉に、しかしフィオルシェーナはいやいや、とでも言うように頭を振った。

「休みなさい」

神威をこめて、もう一度告げ……否、命じた。

リアンリードに次ぐ、長い時を生きてきた彼の言葉に逆らうには、彼女はまだ人間に近すぎた。

「……でも」

それでも、恋人のそばから離れたくないと訴えることができるのは、彼女がそれだけ恋人を愛しており、その亡骸のもとを離れがたく思っているからだった。

だが、それをこそ止めさせなければならないエン・リュウは、さらに瞳に神威を込めて、残酷な問いを口にした。

「そんなぼろぼろの姿で、彼を送るつもりなのか？」

フィオルシェーナが、はっと息を呑んだ。

たたみかけるように、彼は本心とは異なる言葉を口に乗せる。

「紫属の第一位であり、全柱神の最長老であった彼を、そんな状態で送れるのか？」

かつては明るい青であった——今では深い紫に変化したフィオルシェーナの瞳が揺れた。

乱暴なことはわかっていた。

だが、たとえ惨い言いようではあっても、彼女を今休ませるにはこの言葉しかないことがわかっていたから、エン・リュウは躊躇うことなくそれを口にする。

「休みなさい」

命じる言葉に、彼女は項垂れ、やがて諦めたように「はい」とうなずいた。

蒼白な顔で、ふらりと立ち上がる彼女の様子を、痛ましい思いで見つめながら、それでも手は貸さない。

万が一にも、彼女の魂が、甘すぎる誘惑に傾くことがないよう――事前に頼まれていたからこそ。

彼女にとっては、それこそが一番残酷な『思いやり』であったかもしれないが。

（悪いな、フィオ……）

覚束ない足取りで、休息を取るためにこの場を離れる女性の背中を見つめながら、エン・リュウは心で詫びた。

それでも、彼女の命を守ることが、彼にとっての最も重大な約束であったから――。

その魂がこの先どれほどの絶望にさらされるのか、薄々感じ取りながら、楽な道を残してはやらなかった。

◈　◈　◈

フィオルシェーナが去った寝室で、リアンリードの遺体と向き合ったエン・リュウは、ほろ苦い笑みを浮かべた。

応える声がないことを承知で語りかける。

「あなたは、酷いひとですね」

と――。

沈黙だけが支配する空間で、彼はそっと目を閉じた。

思い出が、押し寄せて来る。

1　繰り返す痛みの予兆

陽気で噂好きな風霊たちによって、『その知らせ』を受けた時、エン・リュウがまず思ったことと言えば、またか、の一言に尽きた。

紫属最長老にして、彼のかけがえのない年上の親友が、またしても『人間の子』を拾ったという知らせは、ここ五世紀ほどご無沙汰していたものの、それ以前には珍しくもないことだったからだ。

（あのひとは、懲りるという言葉を知らないのか？）

いつも、それで痛い目に遭い、心に傷を負うくせに、一向に行いを改めないリアンリードに、周囲の同胞が、どれほど気を揉んでいるのか、いっそ思い知らせてやりたいと思う。

だが、そうせずにすませたのは、彼の愚行が、ある時期を境にぴたりと已んだからだ――そう、五世紀ほども前に。

慈しみ育てた『人間の子』から受けた手ひどい裏切りに、さしもの彼も懲りたと見えた。以降、『人間の子』に手を差し伸べる真似は慎んでいたはずだというのに――。

聞けば、今度の子供は、嵐の海を身ひとつで彷徨っていたのだという。
気づいた以上、見捨てられないのは、リアンリードの性だ。
責めることはできない。
だが、その子供を同胞の誰かに委ねることなく、自身の館に連れて行った——というのが、どうにもいただけなかった。
（見捨てることができないのなら、誰かに預けるという方法を、さすがに学んでいたはずだというのに……）
今回に限り、その道を選ばなかった。
そこには、一体どんな意味があるのか——。
考えているだけでは、埒が明かない。
風豹を駆り、リアンリードの屋敷へと向かう途中——。
古い、顔なじみの女性に会った。
「オーランガーダ!?」
自分とは違う、春の季節属性を持つ同胞の女性の姿に、一瞬息を呑んだ。
緑がかった金髪の巻き毛を風に靡かせながら、雲竜子に跨るのは、黄緑属の柱神にして、自分同様、リアンリードと深いつきあいのある存在だった。
「どこへ向かうつもりだ!?」

愚問と知りつつ口にした言葉を、穏やかな春の属性の者とは思えぬ、苛烈な性格の女性はふん、と鼻で笑い飛ばした。

「今更……。この五世紀で、許し難いまでにおめでたい頭になったのか？」

到底信じてもいない言葉を口にすることで、彼女は「邪魔をするな」と告げてきた。

その顔を見るだけで、彼女がなにを目的にして、自分と同じ場所を目指しているのかを把握したエン・リュウは、だからこそ真剣に、彼女を止めなければ、と思った。

彼女の目的が、あまり……というか、はっきり言って、穏やかならざるものであることがわかりきっていたからである。

「待て」

思いは近いものがあるとはいえ、彼女の過激な言動を知る身としては、このまま看過することはできなかった。

「なにを……するつもりだ？」

潜めた声に、余計な世話を焼くつもりなら放ってはおけないと――そうした意思をこめて紡いだ言葉に、オーランガーダはふん、と鼻を鳴らしてみせた。

実に女性らしくない、どちらかと言えば、実に男臭い仕種だった。

それが似合う相手でもあった。

はたして――。

「決まっている。あのお人好しで懲りるということを知らない御仁が新たに抱え込んだ厄介事の種を取り上げて、地の果てに捨てに行くんだ」

黄緑の『神の瞳』を煌めかせ、わかりきったことを訊くな、とでも言いたげな顔になる女性を前に、思いは同じのはずなのに、どうしても止めなければならない——と、せっぱ詰まった使命感が胸に湧き上がる。

それは恐らく、リアンリードのそばにおきたくない対象への、彼女と自分との認識の差によるものだ。

リアンリードという、傷つきやすい同胞は、しかし妙な悪癖があり、時折自らが傷つかずにおれぬような……奇妙な選択をすることがある。

人間の子を懐に招き入れる——というのがそれで、実際、彼はこれまで何度も痛い目に遭ってきた。

そのせいで、彼は何度も傷ついてきた。

そのことを、自分たちはよく知っている。

だからこそ、阻まねば——二度と、同じことが繰り返されることだけは、と心がけてきた。

オーランガーダもまた、それこそを胸に誓っていることは、わかっていた。

エン・リュウもオーランガーダも、求めるものはただひとつ——リアンリードの穏やかなる日々でしかなかったのだから。

「だから、待て、と言っている」

エン・リュウは、必死に言い募った。

オーランガーダは、リアンリードが拾った『人間の子』を見つけ次第、即刻抹殺する気満々の様子だ。

助けたいと思い、保護した子供を、目の前で殺されかけたら……やはり軋轢が生じるだろう。

実際のところ、思いはオーランガーダと似たようなものだから、協力体制を取って、さっさと邪魔な命を摘むというのもひとつの手だとは思ったが、そんな小細工を、リアンリードが見逃してくれるとは到底思えない。

つまりは、愛しき友人たるリアンリードの目を盗んで、彼が拾ったという子供に干渉するなど不可能に近いということだ。

そのことを説明した上で、穏便な方法を検討すべきだと説得する必要性を感じたが、それが難しいことも、オーランガーダの性格もまたよく知るエン・リュウにはわかっていた。

だから、逸る同胞が暴走することだけは止めなければ、と酷と知りつつ言葉を紡いだ。

「先走るな」

と。

「果てに彼を傷つけることになったら何とする。今は様子を見るべきだ」

告げられた言葉に、黄緑の柱神は、かっとその目を見開いた。
「様子を見るなど悠長なことを言って、また同じことを繰り返すことになったらどうするんだ!? あの身勝手な子供のせいで、彼がどれほど傷ついたか、まさか貴公は忘れたとでも言うつもりか!?」
その言葉に、甦る——苦い、苦い記憶。
(誰が……忘れる……忘れられるものか……!)
そんなことは、言われるまでもない。
エン・リュウの身を包む空気が、一瞬にして冷ややかなものと化す。
「わたしが……なにを忘れたと?」
ひんやりとした気を纏いながら、笑みつつ問い返した彼の様子に、ようやく自分の失言に気づいたらしいオーランガーダが気まずげに目を逸らした。
だが、謝罪の言葉を口にすることはない。
互いにたやすく譲れる内容——過去ではないのだ。
「……ここで、言い争っていても埒が明かない。まずは……行くしかないだろう」
そう、このままではなにもできはしないのだ——対象となる『人間の子』はすでに彼の……リアンリードの保護下に置かれてしまったのだから。
かのひとの了承なしに、その身柄を移し替えることは不可能——傷つけぬために動くため

に、かのひとの意思を蔑ろにしては本末転倒というものだ。
（それにしても……あのひとは、いったい何を考えているのか……）
無限とも思える優しさと、それゆえにどこまでも傷つきやすい心を持つ、年長の親友の顔を思い浮かべながら、エン・リュウはため息を洩らした。
これ以上、リアンリードが傷つくような事態は、なんとしても避けたいところだ。
その思いは同じらしいオーランガーダもまた、視界の隅で、憂わしげな息をつくのを認めながら――それを一時の休戦の証として、ふたりは共に同じ屋敷を目指した。
アズアーダ王国の北の果て――『針の森』と呼ばれる場所に、彼らが大切に思う、紫属の柱神の最長老は住んでいる……。

◇　◇　◇

「これはまた、珍しい客人がふたりも揃っておいでだね」
紫属の一位にして、いまでは全柱神の最長老でもある、見た目ばかりは二十代後半の青年は、エン・リュウとオーランガーダを屋敷の玄関で出迎えた。
その漆黒の髪と紫の双眸の美しさは、他のどんな眷族にも比肩を許さず、存在そのものが『唯一』と見なされる。

内面の深さと美しさが、そのまま外見に反映されたこの長老神を、慕う者は数え切れない。

そんななかでも、特に親しいと認識されているエン・リュウとオーランガーダだが、意外なことに、実際に顔を合わせることは稀であることはあまり知られていない。

精霊を介した連絡ならば、頻繁に取り合っているものの、直接互いを訪ねあうようなことは、ここしばらく絶えてなかったことだった。だからこその、リアンリードの前述の台詞なのだが、そこに気まずそうな気配が混ざっていることに、エン・リュウはすぐに気づいた。

それは、当然オーランガーダも同じで、直情的な彼女は、屋敷に招き入れられ、茶を出されるとすぐに話を切り出した。

「人間の子を、拾われたとか……」

エン・リュウに対しては、攻撃的なまでの言葉を口にするオーランガーダだが、リアンリードを前にすると、どうしてか遠慮がちになる。

敬慕の念が強すぎるがゆえのことだと、エン・リュウは知っている。

彼女にとって、リアンリードは友人である以前に、尊敬する師に近い存在なのだ。

「……ああ。船が沈んでね……ひとりきり、海を漂っていたんだ……」

長い睫毛を半ば伏せ、リアンリードはふたりの視線を避けるように、説明の言葉を口にした。

「いくつぐらいの子供だって？」

尋ねると、リアンリードより先に、風霊たちが答えを返した。
――五歳ですわ、夏の一位さま。
――可愛い子供です、わたくしたちの姿が視えて、声も聴こえるんです。
――銀色の髪が、とても綺麗で、青い瞳はまるで南の海のよう！
――髪が短いのが珠に瑕ですけれど……。
――そう！　長ければ、どんなにか可愛らしいでしょうに！
――せっかく、女の子なのに！
精霊たちの言葉に、ぴくりと反応したのはオーランガーダだった。
「……女の子……？」
彼女が呻くような声を洩らした瞬間、リアンリードが「しまった」と言わんばかりの顔をしたことに、エン・リュウは気づいた。
隠しきれなかった親友の迂闊さと、隠さねばならないことだと認識しつつも同じことを繰り返した彼の愚行に、つい息を吐いた。
（よりにもよって、人間の子の、『女の子』だと……？）
最悪だった。
「リアンリード……」
「リアン……」

オーランガーダとエン・リュウの低い、低い声は、ほとんど同時に室内の空気を、同じ響きで震わせた。

◈　◈　◈

「どういうつもりだ？」

声は低く、圧し殺した感情に震えていた。

必死に抑え込まれた感情は怒りと疑問。

リアンリードの愚行を知った瞬間、湧き起こったものである。

リアンリードの屋敷の接客室――いま、ここにいるのは屋敷の主とエン・リュウだけだ。

感情を高ぶらせたオーランガーダはすでにいない。直情径行の気があるオーランガーダは、それゆえになにをしでかすかわからないため、三日後に茶に招くことを条件に――もちろん、その際にじっくりと話し合うことを含めて――一旦お帰り願ったのだ。

感情を昂らせた彼女は、当然すぐにはうなずこうとはしなかったが、問題の少女が未だ面会がかなうほどに回復していないこと、強引に彼女が何らかの手段を用いようとした場合、阻むために実力行使も辞さないことを、精霊たちから示されたことで、少しばかり頭を冷やす必要性を覚えたらしく、大人しく屋敷を辞去した。

もっとも――それがリアンリードの譲れぬ一線である、と気づかなかったなら、決して彼女はそこまでものわかりのいい態度を示したりはしなかっただろうけれど。

そして、だ。

同じ怒りと拒否感を覚えたにも拘わらず、追い払われずにすんだ自分は、オーランガーダとどこが違うのか、考えろと言われているような気がして、エン・リュウは先ほどから忙しく頭を……思考を巡らせている。

理由のいくつかは、すぐに思いついた。

オーランガーダと自分の立ち位置の違い、彼女と自分の性別の違い、出会いの状況の違い……そう、さまざまな、数少ないが、明らかにある自分と彼女との相違点。

それに名前をつけることはできないが、確かにどこかが違うことを、自分もリアンリードもわかっている。

だからこそ、彼は自分を追い返さなかったのであり、尋ねることを許している――否、もしかしたら望んでいるのか。

「……あなたが、助けを求める声を無視できなかった……というのは、わかる。それが幼い命の発した声なら、なおのことでしょう。ですが」

そう、リアンリードがそうした行動を起こすのは珍しくもないことだった。

俗世に関与しないことを定められた柱神のあり方に、彼ほど背いて生きてきたものはいなか

った。

耳に届く悲鳴に、助けを求める声に、彼は無情ではあれなかった。

直接的であれ間接的であれ、聞こえてきた『声』に、彼が無反応であれたことはほとんどない。

それこそが、彼の本質に連なる美質であることを、皆が知っている。

そして、知るからこそ、皆が案じるのだ——その優しさが、逆に彼を追い詰め、傷つける刃となる事態を。

長いこと——本当に長いこと、周囲のそんな思いを汲み取ってか、あるいは自身の傷ついた心ゆえか、リアンリードは『助けを求める声』に対して、直接的な関与を自ら選ぶことはなかった。

ことが『人間の子』に関わることとなれば尚更に。

その理由を知るエン・リュウは、そのことに痛みと安堵という、矛盾する感情を併せ持って見続けてきた。

時間にして、ほぼ五世紀——。

いろいろと、言いたいことはある。

なぜ、今頃なのだとか。

なぜ、今更なのだとか。

尋ねたい……というよりは、むしろ罵りたいというほうが近いかもしれない。
けれども。
それでも、どうしても――疑問に思ってしまうのは。
（なぜ、この今、なんだ……？）
そんな、エン・リュウの思いを知ってか知らずか、リアンリードは困ったような顔をして、それからそっと目を伏せた。
「……君やオーランガーダに心配をかけていることは、わかっているんだ……それでも……どう言えば、伝わるんだろう……。あの子の助けを呼ぶ声が聞こえてきた時……あの命を直にこの腕で掬い上げた時……あの子の凍えた指が、わたしにすがりついてきた時……あの子が、わたしを見て『神さま』と呼んだ時……」
リアンリードの声は、次第に震え、小さくなっていった。
にも拘わらず、そこに宿る力は増していく。
声は、不安に揺れていた。
なのに、宿る響きが、熱が、なにより雄弁に、リアンリードの本音を語っていた。
「あんな小さな子供なのに……小さな、小さな命に過ぎないのに……嬉しかったんだ。精霊たちを通して、世界中の人間と触れあっているというのに、それなのに……あの温もり……違うな、命と触れあえて、望まれたのが……涙が出るほど、嬉しかったんだ……」

（それが、まずいんだろうがっ！）

エン・リュウはそう叫びたかった。

リアンリード――雷皇の異名で呼ばれる柱神には、もしかしたら学習能力がないのか……という、実に酷い感想まで覚えかけてしまったのだが。

そうではない。それとは違う。

全く違う思いのなかにあることに気づいたから、ため息混じりに認めるしかないと、思った。

ただ、不吉な符丁に関してだけは、なんとかすべきだと思ったけれど。

――人間の子

――楽園に迎え入れられた者

――精霊たちと親しく交わった者

――上記の条件を全て併せ持つ――女性。

◈　◈　◈

そう……女性になる前に、引き離せばいいのだ。

それしかないか、とエン・リュウは思った。

2　紡がれる穏やかな時

エン・リュウは、すぐに自らの決断を悔やんだ。
「エン・リュウさま……？」
リアンリードの屋敷の一室で、紹介された小さな子供は、明るい青い瞳を無邪気に輝かせ、養い親の同胞たる彼を見つめた。
（なるほど）
と、エン・リュウは内心うなずいた。
精霊たちが気に入るのも道理だと。
少女――フィオルシェーナは、その容姿ばかりでなく、魂までもが、稀有なる輝きを放っていたのだ。人間の持ち得ぬ『目』を持つ自分たちや精霊の、心を惹きつけて放さない……光。見てしまった以上、悪意を抱くのは難しい。
（しかし、だからこそ厄介だとも言える……）
この少女が長じた時、どれほどの美姫となることか――それのもたらす事態が目に見えるよ

うで、彼は目眩にも似た感覚を覚えた。

今となってはもう遅いが、こんなことなら、オーランガーダを止めるのではなかった——とさえ思った。

だが、今更だ。

退けられた案を採用することはできない。

精霊もリアンリードも、決してそんなことは許しはしないだろうから。

内心、こっそりと息をつき、エン・リュウは少女の前で膝をついた。目線の高さを揃えた上で、挨拶の言葉を口にする。

「初めまして、だな。リアンの養い児殿？　名前を訊いても？」

問いかけに、幼い少女は、緊張した面持ちで、こくりとうなずいた後、果実のような唇からそれを紡いだ。

「フィオルシェーナと申します、エン・リュウさま。あの……わたしも精霊たちのように、夏の一位さま、とお呼びしたほうがよろしいでしょうか？」

尋ねてくる少女の瞳は、どこまでも澄んでおり、この純粋すぎる眼差しは、自分たちにとって危険すぎる——と、エン・リュウは思った。

無垢な希求は、向けられる相手にとっては毒に等しい。

少女の眼差しは、まさにそれである。

未だ、そこに色恋の気配はない。
それでも、感じずにはおれぬ危機感が、ある――人間が、瞬く間に成長し、蕾が綻ぶかのように、鮮やかな変貌を遂げることを事実として認識しているエン・リュウにとって、自覚のない彼女の態度さえ、無視できるものではなかった。
（逸らさなければ……）
危険の種を、思えば彼はその時すでに感じ取っていたのかもしれない。
五歳の幼い少女と、千年を生きる不老の青年との間に生まれつつあるなにか、を。
だが、彼は過去何度かあった事態の繰り返しなのだと認識した。
いや、そう認識することに、決めた。
対象とする少女は幼すぎた上、充分すぎるほどに経験を積んだはずの友人が、まさか今更情熱ゆえに道を踏み外すわけがないと思ったからだ。
（だから、まだ、手はある……）
狡猾且つ卑怯な思惑で、エン・リュウは少女に甘い言葉を投げかけ続けた。
『可愛いなぁ、フィオは』
『綺麗になったな』
『わたしの大事なフィオ』
『そんな、ほっぺを膨らませた顔で、文句を言っても説得力なんてないって……』

リアンリードに少女が傾倒しないように、予防線のように、何度も何度もその思いを押しとどめるために、言葉を繰り出した。

口説き文句――と受け止められてもおかしくないそれらを、しかし少女は正確に受け止め、さらりと流した。

『また、そんな戯れ言を……』

『はいはい、わかりました』

『もう、わたしみたいな子供に、何を言ってるんですか』

『わたしもエン・リュウさまが大好きです』

にこやかに、決して嘘ではないとわかる様子で答えながら、それでも彼女の瞳から、養い親であるリアンリードを慕う光が薄れることはなかった。

(わたしだけでは、無理か……?)

接する対象が少なければ少ないだけ、彼女のリアンリードに対する傾倒は大きくなる――いまのところ、彼女に好意的に振る舞っている柱神は自分とオーランガーダぐらいだ。

フィオルシェーナには、もっと親しくつきあえる柱神の知己が必要かもしれない。

(まだ顔を合わせていない若い連中を引っ張りこむか……? それとも、同性のほうがあれこれ相談しやすいか……しかし、恋愛沙汰を意識させないとなると……)

いくつかの顔を脳裏に浮かべながら、彼はこれからの段取りを考える。

可愛らしい少女――精霊にも愛されるフィオルシェーナ。
彼女にもまた辛い思いを味わわせることなく、すべてがうまく運んでくれればいい。
それもまた、エン・リュウの紛れもない本音だった。

◇　◇　◇

「わたしは、あまり訪ねないほうがいいかもしれない……」
オーランガーダが、そんなことを言い出したのは、少女が屋敷に引き取られて四年が経った頃のことだった。
フィオルシェーナが引き取られた当初こそ、彼女のことを目障りに思っていたオーランガーダだが、実際に会い、言葉を交わす内に、好意を覚えずにいられなかったのだという。
「どうした？　フィオに構い過ぎて精霊たちに焼き餅でも焼かれたか？　それともフィオ自身に呆れられでもしたのか？」
わざわざ屋敷を訪れて、苦い顔で相談を持ちかけられたエン・リュウは、からかい混じりにそう尋ねた。
あまり女性らしからぬ言動をする黄緑属の柱神は、しかし自分以外の対象を着飾らせるのが大好きという、一風変わった趣味の持ち主で、愛くるしいフィオルシェーナを見るなり、夢中

になってしまったのだ。

髪飾りや衣装や靴――細々としたものまで、少女のためにオーランガーダはせっせと集めてはリアンリードの屋敷に持ち込んでいた。

屋敷の主であるリアンリードが、そうしたものに詳しくないこともあり、かの屋敷にあるフィオルシェーナのための物は、ほとんどオーランガーダによって用意されたという話だ。

知った時には呆れたものだが、屋敷を訪れる度、フィオルシェーナが愛らしい格好で出迎えてくれるのは目にも心にも楽しく嬉しいことだったから、エン・リュウは大いにそのことを歓迎していたのだが……当のフィオルシェーナは、あまりそうした意味でのこだわりは持たないことも知っていたから、そう問いかけたのだ。

すると、オーランガーダは麗しい顔を、不機嫌に歪め、「馬鹿馬鹿しい」と言い捨てた。

「可愛く素直なフィオが、そんなことを言うものか。精霊たちとも、良好な関係をつづけているぞ、わたしは。くだらないことを言うな」

「なら、また、なんだって……突然？」

そんなことを言い出したのかと、問いを重ねたエン・リュウに、オーランガーダはため息まじりにかぶりを振った。

「女の子の心の成長が早いことを、わたしとしたことが、失念していた」

心の成長――という言葉に、エン・リュウはひやりとするものを覚えた。

「まさか……まだ、フィオは九歳だろう……？」

恋をするには早すぎる――。

否定して見せたのは、半ば以上願望だった。

しかし、オーランガーダは仏頂面のまま、低い声で続ける。

「恋に早いも遅いもあるか。わたしの初恋は五歳だったぞ……相手が兄という、実に微笑ましいものだったがな。まあ……フィオもまだ、それに近いものではっきりと自覚はしていない様子だが……自覚させるわけにはいかないだろう？」

その事態だけは避けるために、自分たちはあれこれ干渉しているわけなのだから。

「それはそうだが……憧れが昂じたぐらいなら、まだ問題とは言い切れないだろう？　なんだってお前が出入りを止める話になるんだ？」

「憧れも敬慕も昂じれば、容易く恋に化ける感情だ。そこに独占欲まで絡んでくれば、尚更に……自覚を促すことになりかねない」

「独占欲……」

そう言われて、ようやくエン・リュウは同胞の言いたいことを理解した。

「お前とリアンが一緒にいるのを見て、妬いた……のか、フィオが？」

「自分ではまだ、それが嫉妬だとは気づいていないようだが、な。困惑したような、戸惑った顔で、しきりに首を傾げていた。少なくとも、わたしがほかの若い奴と一緒にいても、あんな

顔をしたことはないな」

つまり、相手をリアンリードに限定して、見せる顔だということだ。

それは確かに、あまりよろしくない兆候と言えるだろう。

恋だと自覚してしまったら、なにが起こるかわからない。聡明な子供であるフィオルシェーナが、その感情を養い親に押しつけることはないとは思うが、もし、そうなってしまったとしたら、苦しむのはふたりとも、だ。

応えられぬことに、リアンリードは苦しみ、そんな彼の態度にフィオルシェーナは傷つくだろう。

「他の若い連中に目を向けさせる……ってわけにもいくまいな」

「当たり前だろう。可愛いフィオを不幸にしてどうする。第一、リアンリードが年齢相応の外見をしているならともかく、あの姿で……若いのが太刀打ちできるわけがなかろうが。なにより、フィオ可愛さで、リアンリードが必要以上に連中を近づかせはしないだろうよ」

苦虫を噛みつぶしたような顔で、オーランガーダが「無意味だ」と断定する。

確かにうなずくしかない内容に、「そうだよなぁ」とエン・リュウもため息をついた。

自ら望んで手元に引き取った養い児の少女に、リアンリードはそれこそ目に入れても痛くないほどの愛情を注いで育てている。

いずれは手放すつもりであるとは言え、それまでの時間をできるだけ長く、と願っているの

は傍目にも明白で、そんな彼が、フィオルシェーナに近づく【虫】の存在を許すはずがない。
その意識は、明らかに保護者としてのものだ。そのことに関して、エン・リュウは不安は抱いていない。
だが……だからこそ、急がなければならない、と思う。
「……そういうことなら、確かにお前はあまり行かないほうがいいかな。行ったとしても、リアンリードとふたりきりのところは見せないようにする、とか……。また、そういう状態だったら、若いお嬢さんたちにフィオを任せるのも得策じゃない、か……」
年若い柱神は、すべてがそうとは言い切れないが、恋愛に対して積極的な者が多い。
未だ蕾であるフィオルシェーナを、そうした話題で花としての自覚を促そうとしないとも限らない。無論、少女の恋心が、リアンリード以外に向かうのなら問題はないのだが、恐らくそうはならないだろうことが、エン・リュウには見て取れるのだ。
（まったく、魅力的すぎるってのも罪作りだよ……）
親友のことを思いながら、エン・リュウは取りあえずの策を打ち出した。
「幸いなことにフィオは向学心旺盛だ。あれこれ教えこめば、しばらくはそちらに意識を向けることができるだろう。あとは……その間に」
こちらの言いたいことを悟ったのだろう、オーランガーダが半眼を伏せ、呟きを洩らした。
「フィオの身元を洗うことだな」

それこそが、今最も重要なことだった。

◈　◈　◈

フィオルシェーナの素性を洗うにあたって、最大の障害は手がかりの少なさと、彼女を保護した時点で、リアンリードがなんら手を講じていなかったことだった。

後に、そのことを指摘し、詰ったエン・リュウに、リアンリードは気まずそうに目を泳がせた。その理由もわからないことはないだけに、それ以上責めることはできなかったが、エン・リュウとしてはため息を禁じ得ない。

長いこと、人間に接することを自らに禁じていたリアンリードが、その小さな温もりに触れた時、『心底嬉しかった』のは、紛れもない事実だったのだろう。

そして、いずれは手放すものだと思いながらも、無意識の内に、その時を先に延ばすために、調べることを避けたのだ。

おかげで、時間が経ちすぎて、調べるのが難しくなった。

もっとも、保護されたフィオルシェーナの手は、綺麗に手入れされたものであり、話す言葉は訛のないものだったこともあり、相当上流階級の出身であることは、疑いようがなかったが。

「当時、きな臭かったのはファーリッシュあたり……か。僭王のせいで、王家に連なる貴族の多くが国を追われていたな。そうした家の娘だという線が、濃厚かと思うんだが、あなたはどう思う？」

訪れたリアンリードの屋敷で、エン・リュウは紫属の一位たる青年に問いかけた。

長く真っ直ぐな髪を、気だるげにかきあげながら、リアンリードは静かにうなずいた。

「恐らく、そうなのだろう。身につけていた衣服は上等なものではなかったが、はっきり言って似合っていなかった」

それだけ見抜いておきながら、なぜ――とは、今更だろう。

（せめて、すぐにわたしたちが動いていれば、少しはましだったんだろうが……）

悔いたところで仕方がない。

第一、調べればすぐにわかると、楽観視していたのはエン・リュウも同じだったのだ――精霊たちと語り合う術を持つ自分たちにとって、真実を探し出すことは、さして難しいことではないと――愚かにも思いこんでいた。

そう……うっかりと、自分もまた、失念していたのだ。

精霊――殊に風霊は、あまりにも多くのことに関わるがゆえに、あっさりと過去を忘れてしまうものであることを！

好奇心旺盛な風霊たちは、さまざまなことを集めるのには貪欲だが、手に入れてしまった情

報にはさしたる興味を示さない。

知った時点で、満足してしまうのだ。

だから、それらを貯めこんだり、整理したりすることをせず、さっさと忘れてしまう。

フィオルシェーナが乗っていた船が沈んだ夜のことについても同じことが言えた。数年が経っていたため、彼らはその時のことを既に忘却の彼方へと押しやっていたのだ。

おかげで、エン・リュウたちは、人間と同じように、地道に調べるしかなかった。

沈んだ船の名前、船籍、乗員名簿――しかし、そこに記載されていた名前と住所はまるきり嘘で、やはりフィオルシェーナの身元を知ることはできなかった。

そこでエン・リュウは、仲間内でも、人間と親しくつきあっている面子に協力を仰ぎ、当時の事情を調べ上げたのだ。恐ろしく手間のかかる作業に、何度もうんざりさせられたが、次第に明らかになっていく真実に、彼は希望を抱いた。

懸念していたのは、フィオルシェーナが天涯孤独の身の上であったときのことだ。

そうした場合、適当な里親を見つけて預けることになるだろうが、果たしてそれを過保護なリアンリードが受け入れるかどうか――甚だ疑問だったからである。思春期を迎える以前に、離れたほうがいいとは、彼もわかっているはずだが、里親の選定を理由に、可能な限り先延ばしにするのは目に見えている。

その点、彼女に血のつながりのある親族がいるというのはありがたかった。よほどの遠縁で

もない限り、彼女を返す正当な理由となるからだ。
リアンリードが何と言おうが、フィオルシェーナが少女である以上、ふたりを長く一緒に暮らさせるのは危険すぎる。
紫属の一位である青年は、自らの魅力に無頓着であるから尚更だ。
（いくらフィオがいい子でも、恋をしたらなにを言い出すか、しでかすかわからない……そのとき傷つくのはあなたのほうなんですよ……？）
喉まで出かかった言葉を、しかしエン・リュウは無理矢理嚥下した。
過去の傷を、思い出させることはないのだ。そうさせないために、自分たちが動けば、それでいいのだと……自身にそう言い聞かせた。
そうして、ほどなく調査は終了した。
いまだ僭王による支配を受け続けているファーリッシュ王国――その正当なる先の国王の姪にしてカルクス大公女。
フィオルシェーナの身元が判明したとき、彼女は十二歳になっていた……。

3　隠しこまれた傷

「エン・リュウさま、オーランガーダさま、ひとつ疑問なのですけれど……」
姫君然とした衣装に身を包み、先ほどからずっと、部屋の隅から隅まで歩かされているフィオルシェーナが口を開いた。
「うん、なんだ？」
「どうした、フィオ？　そこ、足が乱れて裾が翻ったぞ、やり直し」
室内のテーブルについたまま、フィオルシェーナの淹れたお茶を優雅に楽しみながら、エン・リュウとオーランガーダが応じる。
「ですから！　どうしてわたしは、こんな動きにくい服を着て、歩きつづけなければならないんですか？　もしかして、わたし、おふたりを怒らせるようなことをなにか、してしまいましたか？」
フィオルシェーナにとっては、ごく当然の疑問であったろう――なにしろ、彼女の身元が判明するなり、エン・リュウとオーランガーダのふたりによって、わけのわからないことをあれ

これさせられるようになったのだから。

動きにくい――実際は、ファーリッシュの上流階級の女性が身につけるものなのだが――裾の長い衣装を着せられ、その上で歩き方までいちいち注文をつけられる。いわゆる虐めではないかと疑ったところで仕方ない。

しかし、当然のことながら、ふたりにそんなつもりがあるはずもなく、両者ともにのんびりとした口調で答えた。

「少し先になるかもしれんが、フィオは【お姫様】として国に帰るわけだからな、戻って早々裾を踏んで転ぶなんて醜態をさらさないで済むよう、練習しておく必要があるだろう？」

聞いた瞬間、少女は不機嫌に頬を膨らませたが、エン・リュウはもちろんかまわない。

「そうそう。立ち居振る舞いは大事だぞ？　優雅な所作は、淑女の嗜みだという話だからな。仮にもリアンリードの養い児が、粗忽者などと嗤われるのは我慢ならん」

粗忽者――という一言に、フィオルシェーナはますます機嫌を損ねたようだが、リアンリードの養い児、という部分のせいで、それを表に出すことはしなかった。

フィオルシェーナにとって、リアンリードは一番の弱点なのだ。彼の名に泥を塗るつもりか――と言われては、どれほど気の進まない行為であれ、逃げ出すことはできないのだ。

わかっていて、ふたりは彼女に『淑女教育』を施している。いささか開始が遅かったが、しないよりはましだろうとの判断の下で。

「よく精霊たちと外に出かけているのはわかっていたが、まさか裾の長い服をほとんど着ていなかったとは思わなかったぞ。わたしが贈っていたぶんは、つまりは箪笥の肥やしにされていたというわけだな」

フィオルシェーナの衣装の大半を調達しているオーランガーダが、軽く睨みつけると、フィオルシェーナは小さく首を竦めた。

「いえ……その、だって、裾が長いと草の汁で汚したり、枝に引っかけたりしそうで……とても綺麗な服ばかりなのに、そんなことになったら勿体ないと思って……」

思って——そうした心配のない、動きやすい服ばかりを選んで着ていたというわけだ。

おかげで、フィオルシェーナはドレスを着ると、ぎくしゃくとしか動けなくなっていた。

そのことに最初に気づいたのはエン・リュウで、知るなり、ここ数年遠ざかっていたオーランガーダを呼び出し、少女の教育を頼みこんだのである。

女性らしからぬ言動に惑わされがちではあるが、オーランガーダの前身は、歴とした大帝国の皇女であり、その方面の教育係としては最適だったのだ……今現在の立ち居振る舞いがどうであれ。

「ものを粗末に扱わない心意気は認めるが、だからといって着もせずうち捨てるのは論外だ。その上、お前、淑女の嗜みを、全然身につけていないだろう」

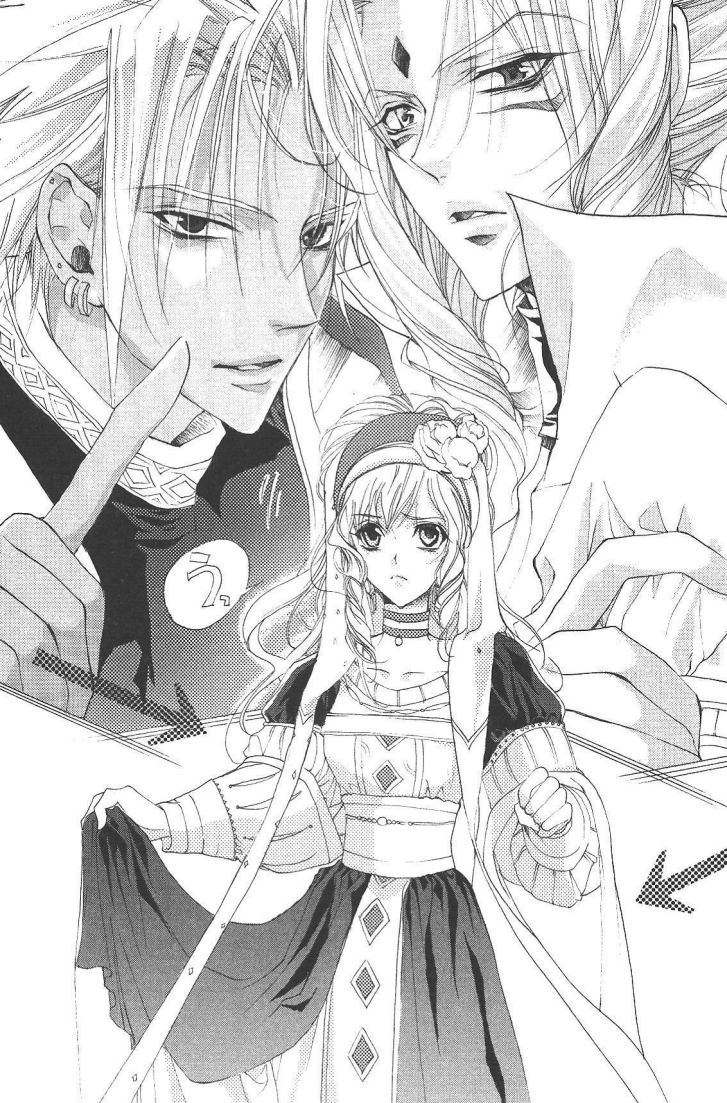
そんなことは——と言いかけたものの、フィオルシェーナは「ない」とまでは言い切れぬ様

子だった。
「……詩歌なら……即興で吟じるぐらいなら……」
できますよ——と、小さな声で応じるものの、それ以外に関しては、どうやら自信がないらしい。
「管楽器か弦楽器の演奏は？」
沈黙が、横たわる。
「……だって、自然の精霊たちの奏でる音を聞いたら、到底かなわないと知れている音を生み出す気になど……」
なれない——から、やっていない……ということらしい。
「駄目じゃないか、そんなことを言っていては」
「駄目だろう、そんな逃げ腰じゃ」
オーランガーダとエン・リュウ、ふたりから同じような言葉をかけられ、フィオルシェーナが不満げに唇を噛みしめた。
わかってはいるのだ——その意味は。
フィオルシェーナが実際のところ、この屋敷……否、リアンリードから離れたくないと思っていることなど。だから、その果てに待つ暮らしのなかで必要とされる教養や知識というものに重きを置いていないことなど。

エン・リュウもオーランガーダも、よくわかってはいた。
それでも、それだけは譲れぬことだった。
ふたりは、いかに愛しく思おうとも、フィオルシェーナのその望みだけは、かなえるつもりはなかったのだから。
「ほら、もう一度、歩いて。裾の流れを意識して……指先をおろそかにしない！」
オーランガーダの言葉に、フィオルシェーナが一瞬泣き出しそうな顔をして、けれど結局は従うのを、苦笑まじりに見つめながら、エン・リュウは別の少女を思う——。
フィオルシェーナとは全く違う容姿と気性を持っていた少女。
その激しさと浅慮でもって、リアンリードの心に決して癒えぬ傷を負わせた、ひとりの少女のことを——。

◇　◇　◇

シェラエティーニという少女は、戦場でひとり立ちつくしていたところを、リアンリードによって拾われた。
夥しい数の亡骸を火葬するために燃やされた炎のごとく、黒炎と呼ぶのがふさわしい色彩を、その髪と瞳に宿した——見る者によっては不吉極まりない少女だった。


う、

肉親を失い、茫然自失で立ちつくしていたという少女を、リアンリードが自らの屋敷に連れてきたのは、もう五世紀も昔のことだ。

悲しみゆえか、絶望ゆえか、感情というものを失ったとしか思えぬ様子のその少女は、不幸にも精霊たちを認識する能力を持たなかった。

精霊たちが用意した食事は、どこからか突然現れる不気味なもの、精霊たちが用意した衣服は怪しげで手を伸ばせない恐ろしいなにか。

当然、そんなものに触れることも口にすることもできぬまま、衰弱する彼女のために、リアンリードは彼女の目の前で、彼自ら料理を作り、先にそれを口にすることで安全を保証し、さらには同じ器から、同じ匙を用いてともに口にすることで、なんとか彼女の命を繋ぐことを得た。

身につけるものにしても、同じ。

決して彼以外の者による品には触れようともしない少女のために、リアンリードは慣れぬ鋏を取り、針を操った。

当時、すでに【雷皇】の異名を取り、柱神のなかでも注目と敬意を集めていた彼に、そこまでさせる『人間の子』に対し、さまざまな批判的な意見が出たが、結局はリアンリードの意志が優先された。

もっとも、彼が慣れぬ針や食材を扱う姿を見たくないという理由で、屋敷を訪れる数を減ら

した者、見たくはないが、放ってもおけないと、結局諦めまじりに定期的に訪問する者とで、後の関係に多少の変化は見られたわけだが。

幼い身で、戦で両親を失い、自らの命さえ危うくしたシェラエティーニに対し、それでも周囲は好意的であった……他でもないリアンリードの庇護下にあることが、なによりの理由だとしても。

しかし、どれほど周囲が手を差し伸べても、シェラエティーニがリアンリード以外に心を開くことはなかった。

ただ、ひたすらにリアンリードの腕に縋りつき、彼が他の同胞と話すことさえ嫌がった。

それもまた、仕方のないことだと、しばらくは皆受け入れていた。

戦場で過酷な思いを味わった幼子の心の傷が癒えるまでは——皆、そう思い、事態を看過したのだ。

しかし、二年が経ち、三年が経ち……ついには五年が経とうとも、シェラエティーニの態度に変化は見られなかった。

いや、彼女のリアンリードに対する依存度と独占欲は増すばかりで、別の柱神が彼の屋敷を訪れるだけで、癇性の発作を起こすまでになった。

そればかりか、彼女はリアンリードが他の同胞に会いに出かけることにさえ、発作を起こすようになったのだ。

あまりにも、異常な事態だった。
このままでは、到底シェラエティーニを『人間の子』の世界に戻すことはかなわない。
そうした柱神の懸念をよそに、彼女は時を経るごとに、リアンリードへの執着を深め、強めていった。
その時、選択を為したのはリアンリードだった。
彼は、シェラエティーニが望むなら、その生涯を共に過ごすと……『人間の子』としての生を彼女が望まず、自らのそばで生きたいというのなら、その願いに添うつもりだ、と。
そう、言い切ったのだ。
それは、長い……人間とはあまりに違う時を生きる存在である柱神としては、最大限の、しかし痛みを伴う思いやりだった。
人間に……はたしてわかるだろうか？
柱神たる身が、人間を伴侶に迎えることのその意味が？
世界の天と地の間を支える御柱たる存在である柱神に課せられた時は、約千年。
それに比べ、人間は長くともその十分の一も生きられはしないのだ。
そうと知りつつ、伴侶に迎えるという……その意味を。その覚悟を。
けれど、シェラエティーニは理解せず……理解しようともせずに、さらなる……リアンリードにすらどうしようもない願いを突きつけたのだ。

自らにとって絶対であるリアンリードにとって、自分もまた唯一の存在でありたいと……確かにきっかけは他愛ないものであったかもしれないけれど。

それでも――彼女が、リアンリードにさらに望んだことは、許されぬことだった。

シェラエティーニは――自らではなく彼の最期の時まで、妻であり続けることを……そのために、自分を『人間の子』ではない存在に生まれ変わらせることを、リアンリードに強請ったのである。

「できない」

と、リアンリードは応じた。

当たり前のことだった。

御柱――柱神の席数は限られており、しかも空いた席があったとしても、この当時の彼にその決定権はなかった。

しかし、シェラエティーニはそれを、絶対の真理ではなく、リアンリード自身の拒絶として受け取った。

唯一絶対と信じた人からの初めての拒絶に、シェラエティーニの心は耐えられなかった。

シェラエティーニにとって、リアンリードは絶対的すぎた。

そして彼女の世界において、彼以外は存在しないに等しかった。

たったひとりの救い主――縋って、望んで……望みすぎて、拒まれたのだと勝手に思った。

痛ましい、と……いまでもエン・リュウは思う。

だが、その世界を展開したのはシェラエティーニ自身であり、勝手に自己完結した挙句、リアンリードを深く傷つけた彼女のことを、許し難く思ってしまうのも、また事実だ。

（せめて、もう少しだけでも、広く世界を見ようとしてくれたら……）

そう、思わずにいられない。

そうしたら、リアンリードがあれほどに傷つくことはなかったはずなのだから、と。

狭い世界に閉じこもり、救い主たるリアンリードをも同じ檻に閉じこめた挙句、自身が変わるのではなく、相手によって変えられる……いや、変えてもらうことを望み、強要した身勝手な娘。

それがかなわぬことだと知るや否や、共にありたいと願った相手を非難して、言語道断な仕打ちをしてのけた……許し難い、娘。

「ずっとそばにいてくれるって、約束してくれたじゃない！」

叫びながら、シェラエティーニは自らの手首に刃を当て、これ見よがしに傷つけたのだと――後に、その場に居合わせた風霊から、聞いた。

「なのに、なぜ、あたしをあなたと同じにしてくれないの!?」

あたしは、ずっと、ずっと、ずっと――あなたと一緒にいたいのに!?

「なのに、なんで……できないだなんて、言うの!?」

酷いじゃない。
そんなの、ひどい。
同じ存在にしてくれないと、リアンリードを詰りながら、シェラエティーニは自身を傷つけ続けたという。
その刃を持つ手を押さえ込んでも、彼女の体に傷が走るのを、リアンリードは……止めることができなかった。
それは、シェラエティーニの身勝手な絶望ゆえの傷——。
けれど、その彼女を戦場から掬い上げ、大切に育て上げたリアンリードの心には、それ以上の深い傷が残された。
慈悲深く、愛情深いからこそ、そこに刻まれた傷はどこまでも深い。
「ひどい……なんで……」
命が尽きる寸前、シェラエティーニは血まみれの顔で、リアンリードを詰ったのだという。
(助けて、貴方と同じ命にしてくれないの？)
あるいは。
(なぜ、追って、命を絶ってくれないの？)
そのどちらゆえの詰問であったのかは、わからない。
けれど、ただ、リアンリードは血まみれのシェラエティーニを抱きしめ、その名を呼び続け

たのだ。

流れる真紅とともに、欠けていく命をひしひしと感じながら、リアンリードはその瞬間を、ただ受け入れることしかできなかったのだ――。

4　古い痛み、新たな痛み

（どうしようか……）

フィオルシェーナの身元が判明して以来、エン・リュウはずっと迷いつづけた。

すなわち、かつてと同じ傷をリアンリードが負わずにすむように、過去の彼の養い児――シエラエティーニのことを、フィオルシェーナに話すべきかどうかを。

精霊と触れあうことを知り、またリアンリード以外の柱神とも好意的な関係を保持している彼女であれば、あの黒炎の少女のような振る舞いに及ぶことはないと思われた。

それでも、初めての恋を自覚した――本人は隠しているつもりでも、傍目には明らかだった――少女の心は、なにがきっかけで爆発するかわからない。

万が一にも、彼女がリアンリードの未だ癒えきれぬ心の傷を抉ることがないように――そうとは気づかせぬよう、歯止めとして事情を話しておくべきではないのか。

聞けば、彼女は決して同じことを強請りはしないはずだと、それだけは確信できていたから、エン・リュウは正直、そうしかけたことがある。

シェラエティーニの話を聞かせ、そのことによって、リアンリードがいかに深い痛みを負ったのかを伝えれば、フィオルシェーナは決して我を通せない。共に在りたい、生きたいという願いさえ、彼女は封じることを選ぶだろう。

自身に自覚はなくとも、そうすることを、すでに決めていることを、偶然ながら、エン・リュウは耳にしていた。

先触れもなく、訪れたときのこと。

悪戯心で、訪問に気づいた風霊たちに口止めをして、いつもとは違う場所に降り立ち、驚かせるつもりで、いつもとは違う道を辿って屋敷に近づいた。

そのとき、偶然耳にした——フィオルシェーナと風霊たちの会話。

「わかってはいるの……わたしがいくら駄々をこねたって、リアンは困るだけなんだって」

深い、深いため息とともに、十四になった少女は風霊相手に愚痴をこぼしていた。

「でも、好きなんだもの……止められないんだもの」

そのとき、周囲にいた風霊たちが、なんと応じていたのかは思い出せない。

ひとしきり、愚痴ったあとに、彼女が洩らしたため息の深さと、続く言葉に宿る重い響きゆえに——。

「……いつもはあんなに優しいくせに……あんな……あんな顔、するんだもの……！」

両膝を抱え込んで、噛みしめるように、フィオルシェーナが洩らした。

「ファーリッシュなんて知らないって……なんで一緒にいたらいけないのって……言ってはいけないことだとわかってるけれど、時々我慢できなくて、つい言ってしまったら……決まって、リアン、泣きそうな顔になるのよ。あんなに綺麗で、あんなに頼りがいがあって……あんなすごいひとなのに……凄い、神さま、なのに……」

くしゃくしゃに顔を顰めて、泣きそうな子供みたいな目をするの――。

「あれって……酷いよ。我が儘言うわたしのほうが酷いことしたり言ったりしてるみたいじゃない……」

でも、多分また言うだろうけど――言わずにはいられないだろうけど。

風霊相手にぼやくフィオルシェーナの言葉の内容は、年齢不相応な洞察力と、年齢相応な我が儘とが相半ばするものだったが。

少なくともそれは、かつてのリアンリードの養い児――シェラエティーニには持ち得ないものだった。

そのことに気づいた瞬間、エン・リュウはフィオルシェーナにシェラエティーニのことを知らせる選択肢を捨てた。

初めての恋を自覚し、実際己の感情を中心にして動いているとはいえ、フィオルシェーナにはリアンリードへの思いやりがあった。

いや、自分の感情だけに溺れても仕方ない状況で、あの海千山千の実質化け物の真実の弱み

を感じ取るなど……それだけでも尋常ではない。

（ああ、この子なら……）

心底から、そう思った。

だが、御柱たる席に空位はなく、彼女には戻るべき現世の場があった。

少なからず、ファーリッシュが再興し、彼女を最高の立場で迎え入れるであろう可能性と勢いが。

残念だ、と心から思いながら、エン・リュウはリアンリードの決断と、世界の流れをただ見守ることを決断した。

万が一、【彼】が【彼女】を選んだならば——そのときは、全力でもって支援しようと。

誰にも告げることのなかった決意は、結局誰にも知られることなく一応の終幕を迎えた。

ファーリッシュ国王シトラーゼン二世が、混迷続くファーリッシュの中枢をしっかりと掌握したのである。

そして、こちらが動き出すより先に、手配をしていたらしいリアンリードの思惑に添うしかない形で、愛しい少女は祖国に送り返された。

この仮初めの楽園における記憶を奪われた上で。

だから——。

（よかったのだ）

と、自らに言い聞かすことしか、エン・リュウにはできなかったのだ。

◈　◈　◈

これが正しい道なのだ。

リアンリードもエン・リュウもそう信じたかった、フィオルシェーナのファーリッシュにおける復権――。

それは、ある意味男性的な――女性であるフィオルシェーナ自身の問題を無視した独断に過ぎなかったのではないか……という事実に気づいたのは、不甲斐なさすぎることに、同じ立場にある女性が投げかけた、無視しがたい疑問ゆえだった。

かつて、精霊と親しみ、その言葉を理解し、さらには己が願いを彼らに聞き届けられるという恩寵を、『人間の子』の身で受けていたオーランガーダにしか、気づけないことだったかもしれない……それは。

『大丈夫なのか……？』

問われたとき、その意味するところを読み解くことはできなかった。

『大丈夫、とは……？』

尋ね返したエン・リュウに、その時ばかりは苛立たしげに、オーランガーダは柳眉を逆立て

た。

『フィオルシェーナのことに決まっている！』

（ああ、やはり……）

とは思ったものの、彼女がなぜ、そうも切迫した様子なのかが理解できず、首を傾げたのを覚えている。

そんなエン・リュウに、彼女は告げた――柱神たる彼らには到底理解しがたい、『人間の子』の男が往々にして犯す罪というものを。

常識的に考えた時、愛する女性の意を無視してまでも手をのばそうとは思わない。諦めるか……諦めきれないなら、相手の心を自分に向けさせ、相愛の関係となった上で、両者の関係を変えていくことを選ぶものだ。

『だがな』

と、苦々しく、オーランガーダは洩らした。

『時々、あるんだ……清浄すぎる気配を纏った存在に、複数の異性が、狂わされたとしか言いようのない反応を示すことが。あの子の纏う空気は、人間としてはあり得ないほどに清浄に保たれている……しかも、あの容姿と気性だ……』

告げるオーランガーダ自身、辛そうだった。

なにかを思い出し、噛みしめるかのように、彼女は告げた。

『本人の、望むと望まざるとに拘わらず……あの子は、嵐の目になるかもしれない』
と。
そして、続けた。
『いや、なんだ。そんなことは。確かにリアンのために、遠ざけた子だけれど……だが、あの子がみすみす不幸になるのは見たくない……わたしだって、あの子のことは愛してるんだ』
だから――とつづけたオーランガーダに、エン・リュウは初めて、苛立ちに似た思いを抱いた。
(なんだ、それは?)
いや、苛立ちというよりは、怒りに近い、その感情――。
(まるで、わたしがあの子を愛していないかのような言い種じゃないか!?)
断じて看過できぬ暴言だ、とさえ思った。
だが、そんな苛立ちは、三年を経たずして霧消した。
オーランガーダが懸念していたことが、最悪のかたちとして実現してしまったからである。
死んだと信じられていたカルクス大公女の奇跡的な生還。
生き残った王族の少なさ故に『王女』の位を与えられ、相応しい婚姻の相手を国主によって与えられた彼女。
アズアーダの、立って間もない青年王――。

それでも、不穏なものは感じ取れなかった。
俗世に関わらぬことを心に決めた彼らの意識の琴線に、彼女に関するなにかが触れることはなかった。
だから……安堵し、油断したのだ。
まさか、フィオルシェーナを手に入れるためだけに、花婿の従兄にして最も信頼されている人物が刃を振るうとは思いもしなかった。
……とはいえ、全ては終わってしまってから、あれこれ考えて作り上げた仮定に過ぎない。
ことは、起こってしまった。
そして、その場に居合わせた柱神は誰一人いず、そうして真っ先に駆けつけたのは……リアンリードだった。
彼の放った怒気の激しさは、なんとも表現しがたいものだった。
世界中に走った緊張、空に走った紫の雷光の凄まじさ。
誰も……エン・リュウでさえ、すぐにリアンリードを訪れることはできなかった。それほどに、激しかった彼の怒気。
数日をおいて、ようやく訪れた『針の森』の屋敷——。
訪問を許され、結界の内部に降り立った瞬間に、感じ取れた気配に、思わず目を瞠った。
閉じられた空間の中に、存在するのはふたつの気配。

よく見知ったものに似た、けれど決して同じではない、あまりにもわかりすぎる……ふたつの気配。

「遅かったな」

思ったよりも――。

夜着をしどけなく身につけた格好のリアンリードの、気だるげな顔を目にした瞬間、エン・リュウは言葉通り、自分が『遅きに失した』ことを自覚した。

愛すべき親友は、自らが決して手を伸ばさぬと心に決めた禁断の果実をもぎ取ったのだ、と。

「なぜだ……？」

もはや遅すぎる問いだと知りつつも、それでもエン・リュウは問わずにはいられなかった。

オーランガーダが懸念した通り、フィオルシェーナは現世においても嵐を巻きおこした。

その結果たるや悲惨なもので、彼女が悲鳴を上げた際、リアンリードが駆けつけずにおれなかったことは……理解できる。

自身も自覚しないまま、他者を魅了しその運命を狂わせることに、フィオルシェーナが絶望し、リアンリードを呼んだことは容易く想像できる。

わからないのは、その先の一歩を、他でもないリアンリードが踏み出した、その理由だ。

ほだされたから、とは思わない。思えない。

シェラエティーニが『同じ存在、同じ身に』と、あれほどに切望したにも拘わらず、彼はその一歩を踏み出すことをしなかった。

それは確かに、その時点では不可能だったから——というのが最も大きな要因であったのだろうけれど。

そして、長いこと彼が保管していた神宝『冬星』が、フィオルシェーナを選んだとしても、少しもおかしなことではなかった……けれど。

（なぜ……）

リアンリードは、最後の一歩を踏み出す気になったのか……？

尋ねたエン・リュウに、リアンリードはひどく儚い笑みを浮かべた。

消え入りそうなその笑顔を、彼はずっと長いこと、忘れることができなかった——。

◇◇◇

「フィオは……」

知っているのか——口にしかけた言葉は、しかし声となることはなかった。

自分は知っている。リアンリードも知っている。

だが、だからこそ口にし難い問題であったからだ。

長い黒髪を揺らしながら、雷皇と呼ばれる青年はかぶりを振った。
「話してないのか!?　話さずに……なぜ!?」
黙っていいことでは決してないはずだ。
リアンリードが全柱神中最長老であるということの持つ、その意味は。知らせずに、彼女の手を取ることは、裏切りとさえ呼べる。
その行為により、彼女は千年に及ぶ生を否応なく受け入れざるをえなくなるのだから。
「あの子が……望んだのだ」
歯切れの悪い口調で、リアンリードが答える。
視線が、落ち着かない。
「それが言い訳になるとは、あなたも思っていないはずだ。なぜ話さなかった。あの子があなたのことで、知りたくないと思うことがあるはずがない。隠したままで……彼女がいずれ、絶望の淵に叩き落とされるのがわからないあなたではないでしょうに！」
ずっと、尊敬しつづけてきた友人だった。
まさか、こんなところで、その思いを踏みにじられるとは――悔しさに、エン・リュウは唇を噛みしめた。
「恐らく……正気ではなかったのだろうな。わたしは、もういつ尽きるかしれぬ寿命を抱えた身でありながら……あの子の手を取らずにはおれなかった。あの子の意志が固いというのは、

結局君の言うとおり、逃げ口上だ。話す機会がなかったというのも、言い訳にはならないな……『冬星』を拒むよう説得しながら、実はわたしはあの子に同じ存在になってほしいと願っていたんだ。共に過ごせる日々が短いと知りながら――」

千年を超えた時を生きる柱神は、これまでに何人かは現れた。

しかしその彼らの中でさえ、リアンリードは最も長く生きている。だからこそ、その命はいつ尽きるかわからない。

今日明日ということはないが、だからといって百年はあるまい。

リアンリードは遠からず、確実にフィオルシェーナを残して逝くことになる。

「……あの子は、わたしが断るなら、君に儀式の相手を頼むと言ったんだ……」

あまりにも思いがけない言葉に、エン・リュウは目を瞠った。

目の前では、リアンリードが右手で顔を覆っていた。

「気づいたときには、抱き寄せていたよ……誰より信頼する君にさえ、彼女を触れさせたくはなかったんだ。愚かしく、醜悪なことだ……そう思うだろう……？」

自嘲混じりの言葉に、エン・リュウは小さく息をついた。

こんなリアンリードは初めてだった。諦めようと足掻きながら、結局は引きずられ、愛しい相手に悲しみの種子を蒔く。

（だが……それこそが）



「……それが、恋というものだろう？」

かけた言葉に応えはなかった。

もう、責めることはできなかった――リアンリードはその終焉を目前にした今、初めて自身でも制御できない恋に落ちたのだと理解してしまったから。

ただ、ふたりが幸福であられる時間が、少しでも長く続くことを、彼は祈るより他になかったのだ……。

エピローグ

人間は最期の時、それまでの人生を走馬燈のように思い出す――と言われるが、どうやらそれは柱神であっても同じらしい、とエン・リュウは苦笑する。

リアンリードに遅れること百五十年――千年に少しばかり足りない生が、今終わろうとしていた。

思い出すのは、楽しかったことばかりではないが、克明に甦る親友との記憶は、愛しくさえあり嬉しくなる。

「エン・リュウ」

枕元にいるのは、結局は恋人という関係にはならず、友人の位置に落ち着いた女性……オーランガーダだった。

その黄緑色の瞳に、案じる色はあるが涙はない。

「……久しぶりに、リアンリードの夢を見たよ……」

急速に老い衰えた喉からこぼれるのは、しわがれた聞き苦しい声――だが、彼女は気にする

様子も見せず、ただ「そうか」とうなずいた。
「……夢が自由になるのなら、文句を言ってやりたかったな……」
そっと目を伏せ、そうつぶやくと、オーランガーダが「全くだ」と同意の声を上げた。
短すぎる蜜月の後、ひとり残されたフィオルシェーナのことを、ふたりはずっと見守ってきた——それこそ、死なせないために。
それほど、一時期の彼女は危うい状態にあった。
それでも、自ら命を絶とうとはしなかった。追ってはいけないと、リアンリードが告げたからしいのだが、どうせならもう一歩踏み込んだ内容を残しておいてほしかったと思う。
死なないための努力を、痛々しいまでの必死さで積む彼女の姿は、見ていて胸がしめつけられた。短いとはいえ、リアンリードと結ばれ、仲睦まじく暮らしていたころの、輝くような笑顔を知るからこそ、尚更に。
(リアンリード……今のあの子を見たら、貴方は何を思うのだろう……?)
生きては、いる。
それは単なる生命活動を続けているという意味ではなく、確かに彼女は『生きて』いる。世界と触れあい、他者と混じり、真っ直ぐに前を見て——その心身の美しさで周囲を魅了しながら、しっかりと生を歩んでいる。
けれど、たったひとつだけ——凍ってしまった部分がある。

恋、だ。

決して彼女は、新たな恋だけは、受け入れようとはしないのだ。

意地になっているわけでも、こだわっているわけでもないのは、見ていればわかる。彼女の中で、リアンリードへの恋が、終わらないだけなのだ。

葬儀の際のフィオルシェーナの姿を思い出す。

リアンリードを無事に送ることこそが、自らの義務だと心に決めた彼女は、毅然と式を執り行った。

あれほどにぼろぼろだったのが嘘のようなその姿に、しかしエン・リュウが覚えたのは痛みだった。歯を噛みしめて、必死に泣くのを堪えている小さな少女の姿が見えた。それでも彼女はリアンリードの養い児にして恋人であるという立場ゆえに、気丈に振る舞っていた。

死期が近づくと、柱神は急速に老いる。

美しかったリアンリードも例外ではなく、亡骸は枯れ木を思わせるような老人の姿をしていた。

以前の姿を知る、特に年若い参列者の中には、耐えきれぬように目を伏せる者も少なくはなかった。

そんな中、彼女は一片の痛みも苦しみも覗かせることなく、ただ愛情のみをたたえた瞳で、その唇に口づけた。

目にした者は、皆胸を打たれた。
枯れ木のような老人に口づける絶世の美女――奇妙なはずの光景は、しかしこの上なく美しいものとして、皆の記憶に刻みつけられたのだ。
その姿に心奪われた男性の柱神は数え切れなかった。
美しく誠実で貞淑な彼女の心を得るために、十人以上の柱神が働きかけたのを知っている。
だが、彼女の恋心を融かす者は現れなかった。
それは今も変わらない。
（リアンリード……貴方というひとは、本当に罪深い……）
「天上の国で……」
ぽつり、と洩らされた声は、すでに言葉にはなっていなかったかもしれない。
「エン・リュウ？」
聞き返してくるオーランガーダの声も――もう、耳には届かない。
「文句を言ってやろう……夢でもいいから会いに行ってやって……もういいからと言ってやれと……。ふ、ふ……あのひとは意外に独占欲が強いから……それは無理か……」
フィオルシェーナと過ごした十数年――千年の中で、ほんの瞬きにも等しい時間の間、リアンリードは次々に新たな顔をエン・リュウにさらけ出した。
嫉妬する姿、恋人への独占欲も露に我が儘を口にする姿、嫌われては困るとばかりに渋々自

嘲する姿――なにもかもが新鮮で、あの頃になって初めて、エン・リュウはリアンリードもまた完全な神の写し身ではない、不完全な人格を持つ生身の存在なのだと認識できたように、思う。

体から、力が脱けていく。

瞼を開いているのも辛くなり、エン・リュウは目を閉じる。

「ああ……」

ため息とともに、願いが……唇からこぼれ落ちた。

「フィオの……花のような笑顔が、もう一度見たかった……な……ぁ……」

（いや、たとえこの目で見ることがなくとも、いずれ……いつか……また）

花のように微笑んでほしい――。

それが、蒼属柱神第一位であるエン・リュウが最後に願ったことだった。

叶う日は、まだ……遠い。

月の堕ちるとき

序章——針の森

アズアーダ王国北部に広がる、針葉樹林——『針の森』の奥には、決して人間が立ち入ることのできぬ幽明の境とも呼ぶべき空間が広がっている。

顕界と幽界の狭間——人間の住む現世と、死者や精霊や神々の息吹が強く存在する幽界とを繋ぐ、まさに橋とも呼ぶべき不可思議な空間の中に、その屋敷は存在した。

人間の王が、自らの権威を他者に知らしめるために建てたものとは違い、そこに威圧の意図は込められてはいない。

だが、最初の主の意向によって建てられたそれは、隅々まで彼の美意識によって整えられている。

この屋敷を目にした者は、まずその美しさに息を呑み、次いでその繊細でありながら力強さも内包する意匠に舌を巻くことだろう。

そうして、最後に気づくのは……気づける者は稀少かもしれないが……主たる人物の、揺るぎない自信だ。

己の存在に対するものか、それとも力に対するそれか……そこまでは読み解けないとしても、皆、本能的に気づくのだ。

この屋敷の主たる存在が、尋常ならざる力と経験と自信を持っていることを。

いや……正確には、『そうであった』ということを、だ。

いまは……そうではない。

屋敷の主が、代替わりしたからだ。

それは、人間の時間にして、八世紀も昔のこと——屋敷を受け継ぐことになったのは、見るからに儚げな、美しくか弱い女性の御柱だった。

御柱——世界に百八在るとされる、天と地の間……『空』を支える存在。

生ける柱である彼らは、柱神とも呼ばれている。

その一員である彼女——フィオルシェーナは、かつて、恋人である同じ……否、より強大な存在であるひとから、この屋敷を委ねられた。

彼の命が尽きる瞬間を、唯ひとり見届けた者として……それを『彼』に許された存在として……。

けれど、今、その自信は揺らぎつつあった。

なぜなら、ほんの少し前に、この屋敷の主に相応しい存在が生まれたからである。

この屋敷の正当なる主であったひとの魂を持って生まれ変わり、さらには柱神たる生を選び

取った青年が。

北の大国アストニアの皇子として生を受け、皇太子となり、明るい未来を約束されておりながら、全てを擲ち、御柱たる運命を選び取った青年の名は——ファナルシーズ。

輝く黄金の髪と、深く澄んだ紫の双眸を持つ彼の愚かな選択に、フィオルシェーナの心は揺らぎ続けている。

彼が人間ではなく、柱神としての生を選び取ったその第一の理由が、自分にあることを知るがゆえに。

『月姫——』

耳元で囁かれた声に宿る熱さを、忘れることはできない。

『わたしにとって、貴女は月です。わたしの心を捕らえて離さない、唯一の……』

声も口調も優しいものでしかなかったのに、耳にした瞬間、身も心も、雁字搦めに縛り上げられる……そんな気がした。

その後も、なにか囁かれ——それ以上、そばにいたら、自分が自分でなくなる恐怖故に逃げ出した。

彼は、それ以上追いかけては来なかった。

そのことに、心底安堵すると同時に、胸の奥から恐怖とも戦慄とも呼ぶべき震えが湧き上がってきたのは、一体何故であったのか——。

その理由を、フィオルシェーナはいまも知らない。
知りたくないと……そう思う。
譬えそれが彼の意に反することであろうとも——それこそが、彼女の今現在の想いであり、選択だった……。

1　不可視の棘

「何度おいでになろうと、わたくしの返事は変わりません」
きっぱりと言い切り、フィオルシェーナは淡々と――ただ淡々と、屋敷を訪れた使者を見つめた。
「ですが、御柱の君……」
精霊たちの友情を勝ち得るに値する人物であろう初老の男に、しかし彼女はかぶりを振ることしかできない。
男が――いや、男の主がどれほど望もうが、それに応えることはできない。応える必要も、またない。
「どのように言葉を尽くされようと、わたくしの答えはひとつきり――お帰りなさい。そうして、貴方の主に、それをお伝えなさい……遷都に否やはありません。ですが、それに伴い、わたくしが居を移すこともまた必要なきことだ、と」
アズアーダ王国の北の国境近く――精霊たちによる結界に包まれ、守られた屋敷の女主人は

冷ややかなまでの態度で、国王の使者に対峙する。

「御柱の君……！」

精霊を友とするがゆえに、屋敷を包む結界に阻まれることなく、ここまでたどり着くことのできた男を前に、フィオルシェーナは微かに目を伏せ、しかし再度断言した。

「繰り返しますが、アズアーダの王都が移るとしても、わたくしが居を移す必要性はありませんし、この要請自体、理にかなわぬものだと言っておきましょう。柱神たるわたくしたちの務めはあくまで世界の天と地の間を支える柱たること――それ以上のことを望まれても、この身は押しつぶされるだけでしょう」

遷都に伴い、新たな王都に近い場所に居を移してほしい――など、耳を疑うしかない望みだ。

御柱とも呼ばれる柱神が住まう場所の周辺には精霊たちが集い、生き物が暮らす上で快適な環境ができやすいと言われている。

それは単なる伝承ではない。

事実、精霊たちは柱神を慕っており、かの存在が心地良く在るための努力を惜しまない。

いかに美しい景色を見せるか。

いかに心地良い空間を作り出すか。

いかに豊かな恵みをもたらすか。

主の寵を得るために、精霊たちが用いる力は尋常ではない。
それが、人間の暮らしを豊かにしている事実は確かにある。
だが、それはあくまで結果的なものであり、当たり前のように考えられ、期待されては困るものだ。
そう……今の、アズアーダから差し向けられた使者が望むように。
「長らく見守ってくださったこの国が、どうなっても良いと……？」
そう、仰るのですか？
無遠慮な使者の言葉に、胸がつきりと痛んだ。
そうだ、と即答はできない。
けれど、そうではないとも答えられない。
ここは——そうしてアズアーダという国は、一言では言い尽くせない事情を孕んだ土地であるから。
気づかれぬよう、唇を噛みしめた後、フィオルシェーナは冷ややかに言い切った。
「わたくしは、土地の守番であることは受け入れても、人や国の守番になった覚えはありません。この屋敷は、かけがえのない方の思いが刻まれた場所……離れるなど——」
わざと、言葉を濁したことで、使者は言葉以上の意味を感じ取ってくれたらしい。
（それで、いい）

嘘は、つけない。

けれど、真実のみで生きていくには、この世界には障害やしがらみが多すぎる。

長い銀の睫毛を半ば伏せると、使者は諦めゆえか、息をついた。

「どうあっても……お心は変わりませんか？」

「おかしなことを。わたくしはもともとお国とは関わりなく過ごしてまいりました。それは代々の国主の方々もご存知のはず……今更、なぜこのような無理難題を持ちかけて来られるのか、逆にお尋ねしたいぐらいですわ」

そう……心底不思議に思う。

アズアーダの王家との関わりは、決して密なものではない。以前の屋敷の主も、そして自分も、必ず一歩退いた距離を心がけてつきあってきた。

だから、今回のアズアーダの要請は——論外としか言いようがない。

いかに懇願されようと、うなずける話ではないのだ。

「これ以上、お話しすることに意味があるとも思えませんわね。お引き取りを」

冷ややかに言い切った彼女を前に、さすがに言葉を失ったらしい使者が項垂れる。

「また、参ります」

「無理です。次は、この屋敷に至る道は示されることはないでしょうから」

使者が、恨みがましげにつぶやいた。

「……まこと、雪のようなお心をお持ちと見える」
雪姫――との異名を取るフィオルシェーナに対する、この上もない皮肉だった。
「どうとでも」
半ばなげやりに答えを与え、フィオルシェーナは気づかれぬよう、密かに息をついた。
（息が……苦しい）
限界かもしれない、とちらりと思った。

◈　◈　◈

古びた小物入れを手に取ってみる。
中身は入っていない。
手に入れたときのことを思い出してみる。
（そう……つきあいで、買い物に出て、ひとりだけ買わないのは不自然だったからという理由で、当たり障りのない品を選んだのだったわ……）
思い出すと同時に、『要らない』と判断する。
かしゃん。
無造作に床に落とされ、陶製の小物入れは砕け散った。

その音の思いがけない大きさに、フィオルシェーナは目を瞠った。
床に落ちた、小物入れだったものの残骸を見つめる。
「……片付けることも、考えなければね……」
捨てること、と片付けること――そうして、選ぶこと。
あくまで、持ち運べる範囲で。
それも、可能な限り早急に――その必要がある。
「それは、何のためにですか？」
不意にかけられた声に、フィオルシェーナはぎくりを身を強ばらせた。
恐る恐る、振り返る。
部屋の扉のところに、彼女が恐れる人物の……優雅な姿があった。
その髪は輝く陽光の金、肌は雪花石膏か白磁かというほどの白皙、長い睫毛に縁取られた瞼の奥に宿るのは、以前ですら稀有な輝きを放っていた……今となっては正真正銘の『神の瞳』と化した深い紫の色彩と、光。
……震えそうに、なった。
「貴方が権利を受け入れない限り、屋敷に立ち入ることは認められないと……わたくしは告げたはずですが？」
権利とは、この屋敷を含む敷地全体の所有権のこと。

かつて雷皇と呼ばれた柱神の生まれ変わりである彼――ファナルシーズには、その財産を受け継ぐ権利がある。

ここは、人が掌握できる土地ではない。

だからこそ、独自の権利が生じるのだ。

「権利だけなら、受け入れましょう……ですが、その後がいけない。なぜ、わたしがここに住まう権利を得ると同時に、貴女が追いやられることになるのでしょう？　到底、看過はできません」

理解できないはずもないことを、わざとわからぬふりで問いかけてくる青年の眼差しを、微かにかわしながら、フィオルシェーナは小さな息を洩らす。

「わたしにそのつもりがないからです」

先ほどのアズアーダの使者に対するときとは、一人称が変わっている。

そのことに気づき、フィオルシェーナは唇を噛んだ。

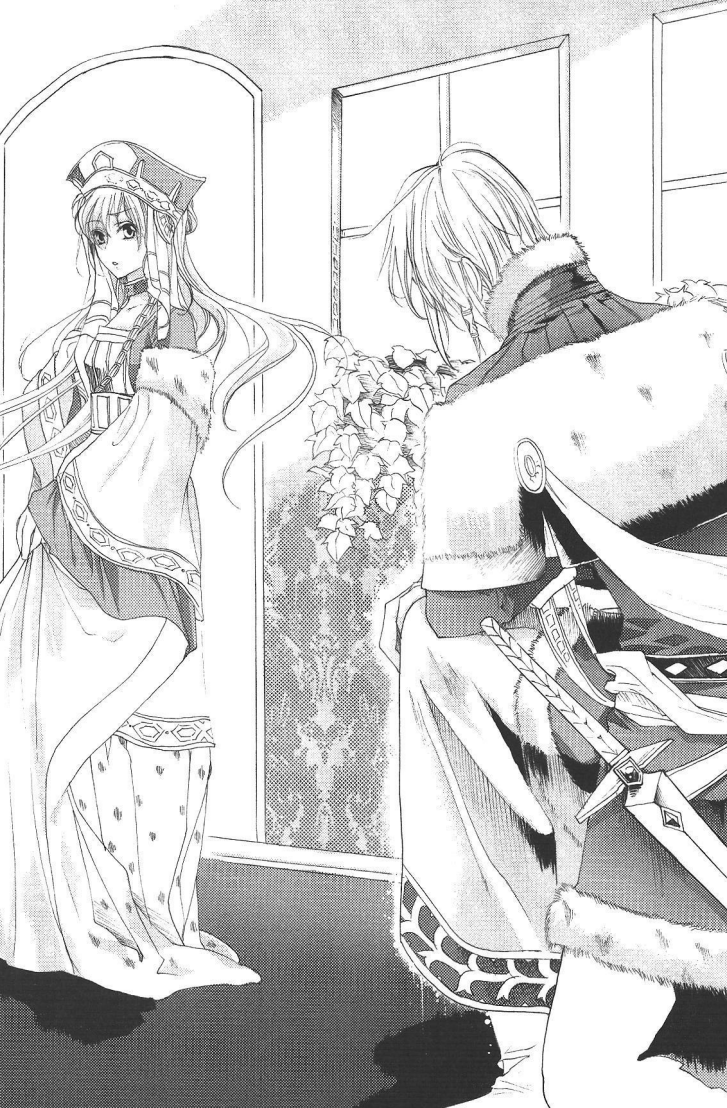
些細なことだが、気取られるわけにはいかないこと――気をつけなければ、と胸に刻む。

そんな彼女の態度をどう受け取ったのか、ファナルシーズが一歩踏み出す。

「入ってはなりません。それより一歩でも近づかれたら、わたしはあなたを侵入者だと見なします。あなたが権利を受け取らない以上、屋敷の主は未だわたし……主の言葉に従わぬ方を、客人と見なすつもりはありませんから」

きつく告げることで、本気であることを示す。
近づけることは、できないのだ。
「ならば、この足には枷をかけましょう……ですが、この唇に枷をかけることは、いかに貴女であろうと叶いますまい。お慕いする想いを伝えることぐらいは、お許しくださるでしょう？」
後半、声にぞくりとするような熱と艶が増した。
声そのものが、皮膚を刺激し、絡みついてくる……そんな錯覚に襲われる。
（なんという声……！）
耳にした瞬間、全身が雁字搦めに縛り上げられるかのよう……。
（なんという、危険な……）
記憶に残る恋人のそれとは違う、艶めかしいとすら呼べる声を、意識から切り離すだけで、大変な労力を要する。
「……疲れております。どうか、お引き取りを……」
震えそうになる声で、ようやくそう絞り出した。
ファナルシーズの顔を、見つめることはできない。
顔を逸らしたまま、退出を促すフィオルシェーナの耳に、青年の淋しげな声が届いた。
「……お許しくださらないのですか？」

傷ついたかのようなそこに宿る切ない響き――ぐらりと、心ごと傾きそうになってしまう。
こんな声で囁かれて、どうして拒むことができようか。
（いいえ、駄目……駄目よ）
自らに言い聞かせ、フィオルシェーナはゆっくりとかぶりを振った。
「それは、わたしに向けられるべきものではありませんわ」
あなたは、勘違いなさっているのです――。
（ひどいことを言っているわ……）
自分に向けられたなら、怒りを覚えずにはおられぬだろう、拒絶よりも惨い言葉。
それでも、自分はこの態度を貫かねばならないのだ――彼がどう感じようと、自分がどれほど傷つこうと。
彼の『想い』を受け入れることだけは、決してできないのだから。
（リアン……こんなことになるだなんて……）
未だ、忘れることのない、艶やかな黒髪の主の美貌を思い出しながら、彼女は相手に気づかれないよう、こぶしを握りしめた。
「――お引き取りを」
固い声で繰り返すと、相手はもう、不満がましいことは言わなかった。
代わりに、ふわりと空気が和らいだ――てっきり怒りか失望に、冷たく張り詰めるものと思



っていたフィオルシェーナは、予想外のことに、思わずファナルシーズを振り返ってしまった。

目に、飛び込んできたのは――。

「ようやく、こちらを見てくださった」

嬉しそうにそう告げながら、目元を優しく細める青年の姿――。

してやられた――そう、彼は『人間の子』であったころ、一流の政治家でもあったのだ。駆け引きは彼の得意とするところなのに……ずっと見守り、知っていたはずなのに、まんまと乗せられてしまった。

しかし、彼はそれ以上近づこうとはせず、その場に優雅に膝をついた。

最高の敬意を表する礼を、いとも優雅にフィオルシェーナに捧げる。

「お慕いしております……わたしの月姫」

目眩がするほど優しい声に、フィオルシェーナは一瞬憎悪さえ、覚えた――。

◇　◇　◇

ひとりきりになった屋敷で、フィオルシェーナは長椅子に身を投げかけた。

アズアーダの使者との対面につづき、ファナルシーズとの対峙によって、精神的な疲労は極

限に達していた。
吐く息は、深い。
（どうして、こんなことになってしまったの……？）
いくら考えても、それがわからない。
いや、ファナルシーズが突然『神の瞳』を持って、この屋敷に姿を現してから三カ月――その間に、彼になにが起こったのかの調べはついた。
かつて、『雷皇』と呼ばれた紫属の柱神であったリアンリードの生まれ変わりの青年は、三カ月前まで、北の大国アストニアの皇太子として、聡明な后と息子、信頼の置ける部下、心を許せる友人らに囲まれ、いずれ皇帝となるべく輝かしい日々を送っていた。
リアンリードの魂が生まれ変わったことを知って以来、フィオルシェーナはずっと、そんな彼の姿を見守り続けていた。
なぜなら、リアンリードは亡くなる前、彼女の恋人だったからだ。
千年以上の時を生き、さまざまな苦しみや痛みを乗り越えて、見事に生き抜いた彼の魂が、今度こそ人間としての幸福を味わえるようにと、その生涯を陰ながら守護するつもりだった……細心の注意を払い、決して自分の気配も感じ取らせぬ形で。
柱神にしても、千年を超える時は長い。
二度と、同じ思いを彼には味わわせたくないのだと――だから、どれほど彼に柱神となり得

る資質があろうとも、神宝を手に、彼には近づかないでほしいと、フィオルシェーナは同胞に頼みこみ、今も彼を忘れていない、ほとんどが長老となった友人たちは、快く彼女の願いを聞き入れてくれた。

新たな半身を求める神宝を預かるのは、位階を持つ長老に限られる。

それは、半身を喪ったことにより、時に傷つき、時に疲弊し、荒んだ気配を放つことも珍しくない神宝の波動を、正常にして清浄な状態に戻すためには、経験を積み、豊かな精神力を持つ長老たる柱神の慰撫が必要だからである。

穏やかで清浄たる状態に戻って初めて、神宝は新たな半身を選ぶのだ。

だから――ファナルシーズが神宝に選ばれる可能性など、万に一つもなかった。

……あり得ない、はずだったのだ。

(だのに……)

強すぎる思いや情熱は、時に容易く運命の歯車を狂わせる。

雷皇リアンリードの半身であった神宝『紫雷』に、彼の次に選ばれた青年は、その強すぎる力に翻弄され、身も心も疲れ切った状態で、八世紀の生を終えた――自分と同じような思いを味わう者を生み出したくないという、強い願いを抱いたまま。

その彼から、『紫雷』を預かったのは、恋する相手をどうしても振り向かせたいという思いを抱いた年若い女性の柱神だった。

恋する相手が恋いこがれるのが、フィオルシェーナであると知るがゆえに、恋敵である彼女に『恋人』を与えるために……その女性ヴィッシャーナは、波動が正常に戻らぬままの神宝を手に、ファナルシーズのもとを訪れたのだ。

彼が、不完全なりと、前世の記憶を持ち合わせており、そのなかで微笑むフィオルシェーナに恋していることを知っていたヴィッシャーナは、『紫雷』の半身たる柱神の死により、世界中の気が僅かに乱れた隙に乗じて、彼に接触したのだ。

フィオルシェーナが健在であることと、これが一度きりの機会であることを告げるために。

そして――ファナルシーズは、その手を取ったのだ。

かつての半身を、再び受け入れ……数日後、彼はそれだけでは手に入らない紫の『神の瞳』を手に入れた上で、フィオルシェーナの屋敷を訪れた。

愛を囁き、彼女の心を得るために――。

だが、フィオルシェーナは受け入れることができない。

決してできない理由と、受け入れたくない理由があり、その心を締めつけるのだ……。

2　癒えない傷

その日、フィオルシェーナは長年の友人を訪ねるために、愛翼たる『雪月羽』に騎乗した。

雪のような純白の大翼と、月光さながらの銀の瞳を持つその幻鳥は、神の眷族たる柱神にさえ滅多に心を開かぬ孤高の存在として知られており、現在、雪月羽に騎乗できるのは、フィオルシェーナひとりとされていた。

その一対が空を飛翔する姿は、夢にも見れぬ美しさをたたえると言われ、精霊たちでさえ、この飛翔に関しては、例外なく最高の協力を約束する。

最速と呼ばれる風豹すら凌ぐ速さを、風霊が与えたこともあるほどである。

その機会がまず滅多にないことも、理由のひとつに挙げられるわけだが――だからこそ、久々の姿に、風霊たちは大喜びで彼らに力を貸した。

風豹ですら半日はかかる距離を、ほぼ半分の時間で駆け抜けたフィオルシェーナは、そのおかげで大した疲労を感じることなく、懐かしい相手に挨拶することができたのだ。

「お早いお着きだこと……雪姫……いえ、フィオ」

屋敷の庭にまで、迎えに出てくれていたのは、現在の紫属の最長老――シャンシーダである。

正確な年齢は不明だが、そろそろ千年に手が届こうかという人物だ。

しかし、未だ柱神の最期の徴となる、急速な老いの兆候も見られない、若々しい……二十代半ばの姿を保っている女性だった。

その髪は、銀とは違う柔らかな乳白色の巻き毛、肌は白磁でも雪花石膏でも象牙でもなく、やはり乳白色としか呼びようのない柔らかな白、極上の紫水晶に譬えられる色彩の瞳を持つ紫属の柱神にあっては珍しく、その双眸は柔らかな藤色をたたえている。

位階を得る以前は、『春呼びの姫』との異名で知られていたという彼女は、冬の季節属性を持つ紫属の柱神にあって、唯一春を連想させる温かい雰囲気を纏うひとだった。

位階を得て以来、ほとんど口にされることのなくなった愛称に、胸に温かいものが溢れてきて、フィオルシェーナは自然に微笑んだ。

「ご無沙汰しております、一位さま」

しかし、この挨拶はまずかったらしい。

シャンシーダは、むっと眉間に皺を寄せたのだ。

「わたくしは、久方ぶりに懐かしい友人に会えたと思って喜んでいたのだけれど、もしかしてそれは早合点だったのかしら？　わたくしは、あなたの名ではなく、位階で呼ぶべきなのかし

ら？」

拗ねたような口調で問いかけられ、フィオルシェーナは一瞬反応に迷った。

相談したいことはいくつもあって、それらはさまざまな意味での助言を求める種類のものであったからだ。

「尊敬と信頼に値する稀有なる先達に、助言を求めておとないました……何度も親身になっていただいた御厚意に期待して……わたしは……」

その願いに則した呼びかけは、いったいどれが一番相応しいだろうかと、フィオルシェーナは首を傾げずにいられなかった。

紫属の最長老たる彼女に、親しい昔なじみである彼女に、懐かしいオーランガーダの妹分であり、姉のように慕った彼女に——果たして今、どう呼びかけるべきなのか。

困惑しきったフィオルシェーナの様子に、シャンシーダがくすりと笑みを洩らした。

「相も変わらず、フィオの無精なこと。普通は、そこまで悩みを抱えこむ前に、一つずつでも解決するために動くものですよ」

身動きもできなくなるほどに溜め込むものだから、こんなささやかな皮肉にも、応じきれずに立ちつくしてしまうのですよ。

悪戯っ子のような笑顔でそう告げられ、フィオルシェーナは赤面するしかなかった。

「申し訳ありません、シャンシーダ」

様をつけると、途端に不機嫌になっていた時代を思い出し、そう呼びかけた彼女に、最長老となっても気さくさは変わらない美しい女性は、にっこり笑った。
まるで「よくできました」とでも言わんばかりの、余裕と慈愛に溢れた笑顔だった。

◈　◈　◈

フィオルシェーナがシャンシーダに持ちかけたいと思った相談は、ふたつ――。
しかし、シャンシーダにはお見通しだったらしい。
「近頃、屋敷の端が隣り合っていることを理由に、駄々をこねる困った隣人が現れたようだけど、相談事はそれかしら？　それとも、困ったことをしでかした若い娘の件かしら？」
敢えて軽い表現で告げられた内容に、フィオルシェーナは目を伏せた。
シャンシーダの慧眼には、恐れ入るより他にない。
「正直なところ、どちらについてもご意見をいただきたくて……わからないのです。どちらについても、なぜこんなことになったのか……」
アズアーダの王の、突然の遷都宣言――それに伴い、自分にまで同行を求めるその本意。
もしも、王都をより気候の厳しい北部へと移すというのであれば、そう願う気持ちはわからないでもない。

だが、南へ移すのに、何故自分を求めるのか――。
柱神の加護を、そこまで執拗に希われるような干渉は、これまで一度としてなした覚えもないというのに。
くすり、とシャンシーダが再び笑みを零した。
「シャンシーダ？」
「フィオ。あなたは本当に世捨て人のような暮らしをしてきたのね……アズアーダにおける、あなたにまつわる伝説すら知らないだなんて」
声には呆れつつも、面白がるような響きが宿っていた。
気さくで面倒見のいい藤色の双眸を持つ女性は、その一方で悪戯好きな少女のような一面をも併せ持っている。
おかげで、フィオルシェーナは何度もからかわれ、遊ばれたものだ。
「……伝説、ですか……？」
心当たりはない。
これもまた、シャンシーダお得意の話術による悪戯だろうか？
首を傾げそうになりながら、そんな反応を素直に見せれば、ますます遊ばれるかもしれないと、気にしすぎて固まってしまったフィオルシェーナの様子こそが愉快だとでも言わんばかりに、相手はころころと笑い出した。

「考えすぎて、身動きがとれなくなるのは、あなたの困った悪癖ね、フィオ。まあ、昔、あなたが無邪気なのをいいことに、さんざん恥ずかしい嘘を吹き込んだわたくしの言葉を、素直に信じないのはある意味良い心がけといえないこともありませんけれどね」

元凶だとわかっているのなら――正確には、エン・リュウの紹介にしろ、オーランガーダの紹介にしろ、引き合わされた同胞は、皆一筋縄ではいかない面子ばかりで、おかげで精神面であれこれ鍛えられると同時に、純粋に物事を捉えることには、幾重もの濾過機能が働くようになってしまったあたり、長い時を生きる上では必要な通過儀礼だったという自覚はあるのだけれど――少しは手控えて欲しかった……と、つい思ってしまうのは、甘えだろうか。

「ですが、今回のことに関しては、その伝説とやらが関係しているのは確かなことなのですよね……？　使者などは、わたしが拒絶することこそが信じられないという顔をしました……いったい、どんな風評が今のアズアーダに広がっているのです？　リアンならともかく、わたしがアズアーダの守護神と見なされるようなことは、記憶を浚っても見つけることができないのですけれど？」

フィオルシェーナは、柱神として『俗世に可能な限り干渉しない』という立場を守りつづけてきた。

神の眷族たる柱神が備える知識や情報の多くが、『人間の子』の世界にあっては重すぎる意味を持つことを知って以来、決して踏み外すまいと心がけてきたことだった。

たとえば、精霊たちから聞いた話ひとつでも、人間の世界では戦が起こりかねない重要事項となることが少なくないのだ。

ある国の、ある地方が干ばつに見舞われそうだ——もしくは逆に水害に遭いそうだ。そういったたったひとつの情報で、地上にはたやすく大きすぎる波紋が広がってしまう。

被害を受けると事前に知り得た国は、被害を補うために、近隣の豊かな土地を奪う計画を立てかねない。また、事前に隣国がその事実を知り得た場合、困窮したその国から攻撃を受けぬための予防策を立てたあげくに、弱った時点で攻め入ることもあり得る。

それは、別段柱神の言葉によらずとも、各国の諜報戦でも起こり得ることではあるが、しかし情報源が柱神であった場合、その信頼度は格段に上がるうえ、それを知り得た国こそが、御柱たる神の加護を得た『正義の側』だと認識される。

危険極まりないことだ。

だからこそ、柱神は一部の例外を除いて、国政に関わる人物との交友を極力排除する方向で動く。

フィオルシェーナもこの八世紀というもの、その姿勢を崩したことはなかった。

だのに、なぜ、いまごろ——？

疑問は尽きない。

そんな彼女に、愛しみと哀れみが相半ばする視線を投げかけた後、紫属の一位たる女性は語

って聞かせた。

「事態は……実のところ、複雑なのか単純なのか、わたくしにも判断できないわ。ただ、あなたが抱えている問題ふたつが、複雑に絡み合っていることだけは確かなようね。話し始めると長くなるから、まずはあなたが首を傾げた、アズアーダにおけるあなたの伝説のことを教えてあげましょう」

あげましょう――といいながら、両手でフィオルシェーナの頬を包み込み、覗き込んでくるシャンシーダの瞳には、「逃げられないから観念しなさい」とでも言いたげな光が、熱く激しく燃えていた。

「あなたがかつてファーリッシュの王女であり、アズアーダに嫁いだフィオルシェーナ姫であることは、すでに公然の秘密となっているわ」

それは、思いもかけないことだった。

事実には違いない。

フィオルシェーナは確かにファーリッシュの王女として、アズアーダに嫁いだ――十八歳の時のことだった。

けれど、その後に起こった事件は、あまりにも血腥すぎ、それゆえに――リアンリードの力添えもあり――秘密裏に処理されたはずだった。

どうして、公になどできよう。

国家間の政略結婚とはいえ、望まれて嫁いだ花嫁に懸想した別の男が、彼女を得るために花婿を式の最中に暗殺した、などという醜聞を。

その男が、花婿の実の従兄であった、などと。

今でも、思い出すだけで肌が粟立つ……恐ろしい記憶だ。

正直なところ、思い出したくもない。鮮明な記憶は、時に夢として甦った。その度に、目覚めとともに、フィオルシェーナは抑えきれない嘔吐感に悩まされつづけてきたのだ。

嫌悪感、恐怖感……そして、罪悪感。

そんな負の感情ばかりが渦巻くあの出来事が、いったいどんな伝説となり得るというのだろう!?

その思いを正直に口にしたフィオルシェーナに、シャンシーダが諭すように、優しく告げた。

「人間というものは……わたくしも、あなたも覚えがある通り、信じたいことをより信じやすくするためになら、心さえ騙せてしまえるものなのですよ」

その前置きの後、告げられた『説明』に、フィオルシェーナは思わず両手で顔を覆った。

耐え難い苦痛が、心を切り裂いた――。

◇　◇　◇

「なぜ、そんな……」

あまりの内容に、フィオルシェーナは両手で顔を覆った。

事実から、あまりにもかけ離れたひとびとの『願望』が紡ぎ出した『事実』は、彼女にとって心を突き刺す棘でしかなかった。

「何度も言うようだけれど、人間は信じたいことを信じる……そういう生き物なのよ」

慰めるようなシャンシーダの口調も、フィオルシェーナの心を軽くはしてくれなかった。

なぜなら――。

シャンシーダが語った、アズアーダにおけるフィオルシェーナの真実は――。

奇跡的な生還を果たしたファーリッシュの王女たるフィオルシェーナは、運命的な絆でもって、アズアーダの国王アフレイドと婚姻を結んだ……。

しかし、彼女の美貌にもともと玉座への野心を抱き続けてきた臣下のひとりが、めでたき婚礼の席で逆心を行動に移し、夫たる国王の命を奪い、彼女を無理矢理我が物としようとした。

しかし、そのような暴挙を、天の正義が見過ごすはずがなく、裁きの雷が大逆の徒たる罪人の体を打ち抜き、美しき后を救ったのだ――と、今では伝えられているのだという。

そして、夫を失った后は、神々の一員に迎え入れられ、王家の行く末を見守り続けているのだと……それが、他ならぬ『針の森』に住むフィオルシェーナなのだと伝えられているというのだ！

（なんという、皮肉……）

実際に起こった事件に、訂正の余地はない。

だが、その内実は大違いであり、知れば皆失望のあまり激怒しそうなものだった。

フィオルシェーナの存在に魅了され、逆心を起こしたのは、確かに臣下ではあったけれど、同時にアフレイドの最も近しい系統の従兄であった。

アズアーダ直系中の直系の血は、アフレイドの死によって途絶え、いまの王家はその『逆賊』の兄弟筋の流れを汲むものなのだ。

その流れを、どうして『夫を殺された妻』が『神の一員』となり『代々守護する』つもりになるなどと信じられるのか……言うまでもなく、情報の操作が行われていたには違いないだろうけれど、ここまで酷いとは、想像もしていなかっただけに、息のひとつもつきたくなった。

「なんという、滑稽で酷い誤解……」

あの婚礼の席で、花婿たるアフレイドの首が目の前で転がるのを目にし、さらにはその実行犯であるカストライドに強引に抱き寄せられた時、胸に湧き起こったのは、純粋な拒絶——ただそれだけだった。

耐えられなくて、悲鳴を上げた。
その悲鳴に応えてくれたのは、自分が最も慕っていたかつての養い親である柱神の青年で……再会と同時に、封じられていた記憶は解放され、忘れさせられていた彼への恋心はあっという間に再燃した。
あの瞬間、自分の心から、アズアーダのことなど消し飛んでしまった。
後は、恋に浸り、優しい神に縋りつき、半ば無理矢理にその愛を勝ち取っただけ。
アズアーダへの慈しみなどなかった。
アズアーダの外れに住みつづけたのは、そこが亡き恋人の残した屋敷であったから。
世界中のどこよりも、リアンリードの気配を色濃く残す場所がそこであったから——それだけだ。
そんな自分に、なんという誤解と期待を抱いているというのか——アズアーダの民は。
けれど——その誤解があるからこその、あの使者の言葉だったのだと、今のフィオルシェーナには理解できた。
理解はできた、けれど……。
「そういうことであれば尚更、彼らの願いを受け入れるわけには参りませんね……」
アズアーダの北の果てに居を構えながら、それでも同じような地理的条件にある他国とは比べものにならぬほどの気候的な恵みを与え続けてきた『針の森』の守護者。

彼女がもし、もっと国の中心近くに住まってくれたなら――。

そう期待する思いはわからないでもない。けれど、そんなことは到底あり得ないのだ。

フィオルシェーナがこの『針の森』に――否、この屋敷に住みつづけてきたのは、偏にここがリアンリードとの思い出に満ちた唯一の場所であるからだ。

ここそのものを愛し、執着するからこそ、その思いを汲み取り、精霊たちも尋常ならざる恵みを周囲にまでふりまく。

違う土地では決して生まれない奇跡なのだ。

だから、アズアーダ国王の望む通り、遷都に伴い、居を移すことはできない。応じたとしても、これまでと同じ奇跡的な加護を、王国に与えつづけることはできない。

元より、そのつもりもない。

アズアーダの民は不幸だと思った。

こんな自分を救いの手を持つ神などと信じているのだから――。

すでに、紫属の『第三位』の位階を得た身でありながら、どこまで自分は惑いつづけるというのか――。

答えは出ない。

問いばかりが増えていく……。

◇◇◇

「ごめんなさい、フィオ。あなたの心を悩ませたいわけではなかったのよ、ただ、長い時を生きていく上で、わたくしたちには身に覚えのない他者の思いがかけられることも珍しくはないのだと……いえ、この件に関して以外なら、十二分にわかっていることは承知していたのだけれど、どうにも鬼門のアズアーダに関してだけは、あなたに隙があるように見えたものだから……急所を突かれると、あなたは昔から弱いから」

落ち込みも露なフィオルシェーナに、情報提供者であるシャンシーダは心配そうな顔と声で、けれど決して優しいだけとは言い難い内容の言葉を羅列してくれた。

一見慰めてくれているようで、全然そうではないと感じるのは、決して気のせいではないはずだと、フィオルシェーナは思わずにいられない。

年長の……というか、エン・リュウやオーランガーダを通じて知り合った人物に対して共通して覚える苦手意識が、いつになっても薄れることのないのは、彼らの容赦ない慧眼ゆえのことだろう。

八世紀を生き、すでに充分な経験と知識を積んだと思う自分だが、到底敵わない、苦手だと感じさせる彼らの存在は貴重で……時に煙たく、稀に憎らしい。

今がまさに、その『稀』なときだった。

「それはともかく――」

深刻な事態にあるアズアーダとフィオルシェーナとの関わりを、残酷なまでにはっきりと突きつけ、悩ませた直後だというのに、まるで「それはそれ、これはこれ」と言わんばかりの顔で、シャンシーダは話を転じた。

よりにもよって、今、一番触れて欲しくない話題に。

「雷皇から熱烈に口説かれているようだけれど、未だに拒んでいるそうね？　なぜか、と尋ねてもいいかしら？」

好奇心に、藤色の双眸を輝かせるシャンシーダの顔を前にして、フィオルシェーナは正直泣きたくなった。

紫属の最長老たる彼女に、相談したいことのひとつは、そのことだったこともあり、こんな反応は想定外だった分、衝撃と落胆は大きかった。

「……彼は、正規の段取りで半身に選ばれたわけでも、正規に認められた方を祭主に儀式を行ったわけではありません……我々と同じ存在だと、認めるような発言は控えるべきかと存じます。なにより、『雷皇』の名を持つ方はただひとり……！」

彼は、「あのひと」ではないと。

その意をこめて、強く主張したフィオルシェーナに、けれど手厳しい先達は、彼女の望む優

しい言葉を返してはくれなかった。
「彼は『雷皇』です。他の誰でもあり得ません」
「いいえ！　いいえ、違います！」
必死になって、フィオルシェーナは訴えた。
「リアンリードのことは、指先に残る感触のひとつまで覚えています！　忘れられるものではありません！　違います、彼は雷皇では……リアンリードと明らかに違います！　譬え同じ魂を持っていようと、彼は違います……違うのです……しかも、あんな理の間隙を突くようなやり方で、我らの一員に連なるなど……そんなことが許されていいはずがありません。除名を……どうか、彼が間違って得てしまった神籍を、シャンシーダ……どうか、あなたの名と権威でもって、剝奪してください！」
自らの唇の紡ぐ言葉に心を引き裂かれながら、必死にフィオルシェーナは『紫属の一位』たる女性に懇願した。
彼には、温もりに満ちた家族が在った。
彼には輝かしき未来が在った。
彼には、人間としての満足のいく終焉が、在った。
この現在の状況こそが、間違っているのだ！
間違いは、正されなければならない。彼は『人間の子』としての生を全うすべきなのだ。

そう主張するフィオルシェーナに、シャンシーダは哀れむような目を向けた。深い慈しみをたたえたその眼差しは、しかし今のフィオルシェーナが欲しいものではなかった。

「確かに、彼は……彼らは、古くから定められた理の裏をかくような方法で、神籍を手にしました。後に続く者が出ないよう、相応の罰を与える必要はあるでしょうね。ですが、あなたの望む方向で、それが下されることはないでしょう。神籍の剥奪はかないません」

「シャンシーダ！」

どうして、と縋るような目で見つめたが、見返してくる藤色の双眸には揺るぎない意志の光が宿っていた。

「……あなたは、誤解しているのですよ、フィオ。我々が神宝の半身を同胞として迎え入れるにあたり、数多くのことを決めてあるのは、今回のような、不幸な巡り合わせを避けるためのことで、本来、儀式には神宝と祭主と本人の意志さえ揃っていれば、『生まれ変わり』は為せるの。位階を持つ長老が神宝を預かり、安定させるのは、新たな半身となる人物に、余計な負担をかけぬため。祭主に慕う年長者を選ぶのは、心が通じた相手との儀式のほうが、心身ともに共鳴しやすくなり、神たる身に生まれ変わる流れが和やかなものになるからよ。今回のようなことを、もしも別の『人間の子』が為したなら、確かに大変危険なことになっていた可能性が高いわ……けれど、あの方は、ただの人間ではなかったから……」

結果として問題はないのだと――また、そもそも神を人間に戻す術などないのだと告げられ

て、フィオルシェーナは大きく目を瞠った。
「そんな……」
と、つぶやく。
足下が崩れてしまいそうな絶望感に、唇が震えた。
そんなフィオルシェーナに、シャンシーダが静かな声で問いかけた。
「あなたが彼の求愛を拒むのは、彼に人間としての生を歩んで欲しかったから……それだけなのかしら？」
そうだとうなずきかけて、フィオルシェーナははっとする。
（いけない）
そうだと認めては、最早戻れない道を歩き出したファナルシーズを受け入れない理由はないとされてしまう。
「……それだけではありません。先ほども申しました通り、譬え同じ魂を持つとは言っても、かの皇子はわたしが愛したあの方とは違う存在です……」
リアンリードでは、ない。
「かつての雷皇そのひとではないから、愛に応える気になれない？　では、仮に彼がその稀なる力を用いて、以前の記憶をすべて取り戻し、以前と同じ姿を纏ったならば、あなたは受け入れる気になるの？」

シャンシーダの声は穏やかだったが、その紡がれる内容は、厳しいものだった。

いたたまれなさを覚えながら、フィオルシェーナは小さくかぶりを振った。

「そんな、あり得ない仮定を持ち出しても無意味です。彼はリアンではない……そうある必要もないのですから、彼は、中途半端に引きずっている前世の記憶から解放されるべきだと思うだけです。彼は……勘違いしているだけなのですから」

「他人の心を正確に把握することなど、誰にもできませんよ、フィオ。それに、引きずっているのはあなたも同じでしょう？」

踏み込まれるとは思わなかっただけに、胸がどきりとした。

「……ただ一度の恋の記憶を胸に抱いて生きるのが悪いと……そう仰るのですか？」

何度も、似たようなことは言われた。

リアンリードを亡くし、ひとりであり続けた自分に、友人たちは幾度も新たな恋を勧めた。生きているのに、心を殺すのは愚かしいことだと――そのような操を立てたところで、亡き人が喜ぶとは思えないと。

そんなことは、フィオルシェーナ自身、言われるまでもなくわかっていた。

リアンリードは、最期の時まで、自分のことを気遣っていた。

『逝くことは恐ろしくはないが、残していくお前のことだけが心配だよ、フィオ』

苦しいだろうに、それを感じさせない笑顔で、彼はそう囁いた。

『ひどく、お前を悲しませてしまうのが辛いな……そうとわかっておりながら、お前を抱き寄せてしまったわたしを、お前はいつか恨むだろうか……？』

そんなはずがないことを、知らないはずがないだろうに、見当外れなことを口にした、残酷な恋人。

彼が手を伸ばしたのではない。自分が無理矢理抱きついたのだ――その腕を振り払えなかった優しいひとは、それさえ自らの罪だと言い切ったのだ。

『お前を泣かせるのかと思うと辛いよ……だが、泣けない痛みは、癒えることがないから……けれど、約束しておくれ。いつか、もう一度笑顔を取り戻すと……幸福に微笑むことを、必ず思い出すと……』

苦しげな息の下、いつまでもフィオルシェーナのことしか口にしない恋人に、「約束するから」とうなずくことしかできなかった。

彼を亡くして――泣いて、泣いて。

けれど、涙はいつか乾いた。思い出のなかにしか、彼がいないと認める度に、心に痛みは走ったけれど、それでも彼との約束だから、笑うことを思い出した。

彼と過ごしたひとときは、痛み以上に幸福をもたらすものだったから、記憶とともに生きていくことが、いつしか当たり前になった。

それを不幸とは思わない。

誰にも……そんなことは言わせない。

だから、これまでフィオルシェーナのその選択について、一言も咎めようとしなかったシャンシーダの言葉に、胸が軋んだ。

しかし、年長の柱神は、そうではないとかぶりを振った。

「違いますよ、フィオ。わたくしが、あなたに何かを強いたことがありますか？　わたくしが言いたいのは、あなたの今の心の内側で起こっていることです。あなたは頑なに目を逸らそうとしているようだけれど――」

なにを言われているのかわからず、フィオルシェーナは首を傾げた。

「なにも起こってなど……いえ、確かに困惑はしてますけれど……目を逸らそうとだなんて……なにも」

言葉は、本心からのものだった。

少なくとも、彼女はそう信じていた。

「そう……？」

だから――。

意味ありげに問い返されて、苛立ちを覚えた。

「なにを仰りたいのです？」

いらいらとした思いに、つい声に棘が混じった。

「心は時に、望んでもいない思いを芽吹かせることがあるけれど、いくら見えないふりをしようと、『在る』ことを知る限り、なんの解決にもなりはしないという話よ。受け入れるのも封じるのもあなたの自由だけれど、『在る』ことそのものは受け入れなさい。そうでなければ、あなたが苦しむだけですよ」

いささか抽象的すぎるシャンシーダの言葉に、なにをどう答えるべきかわからず、フィオルシェーナは小さく息をついた。

本当に――なにを言われているのかわからなかったのだ。

シャンシーダの、続く言葉が耳に入る、その瞬間まで。

「……手を焼く感情ではありますが、嫉妬は決して醜悪なものとは限りませんよ」

どくり、と胸が大きく脈打った。

ナイフを突き立てられたかのような痛みに、フィオルシェーナは大きく震えた――。

3　掻きむしられる傷痕

森に入ることも許されぬというのに、今日もアズアーダの使者は入り口まで足を運び、届くかどうかもわからぬ手紙を置いてから立ち去った――前日に残した同じ封筒が、その場から消えていることに安堵の色を見せながら。

その姿を、風霊たちの目を借りて見つめていたフィオルシェーナは、複雑な思いのまま、ため息を洩らした。

手紙を受け取らなければいいのだと、わかってはいるが、仮にも一国の政治に関わる内容のそれを、誰が訪れるかわからない場所に放置しておくわけにもいかない。丁寧且つ複雑な術を組み合わせた封印がなされているとはいえ、人間が施したものだ、解呪できぬ者がいないとも限らないのだから。

自分に当てられた手紙が原因で、アズアーダが戦に巻き込まれるようなことになったら、悔やんでも悔やみきれない。

だが、だからといって、王の要請に応えるつもりもない以上、事態は膠着状態から抜け出

せない。

（手紙に書かれている内容はいつも同じ……民により良き暮らしを与えるため……。けれど、どうしてなのか、真実そう願っているという想いが伝わって来ない……）

精霊たちに問いただしても、曖昧な答えが返ってくるばかりだ。

――三位さまが気になさるようなことではありませんわ。

年若い精霊たちは、口々にそう言うばかり。

――フィオが気にする必要はないわ。

と言うのは、昔なじみの精霊たち。

――放っておけばいいのよ。

――そうよ、自業自得なのだから。

精霊たちは、時々ひどく残酷な物言いをする。

それは大方において、理や自然に対する敬意を忘れた存在――主にそれは思い上がった人間であることが多いのだが――が、自らの犯した罪によって、困窮している場合に限られる。

（そういえば、ここ二十年ほど、アズアーダのことを、精霊たちが進んで話してくれたことはなかったのだわ……）

八世紀を超える時を生きてきたためか、時間の経過に関して鈍くなっている自覚のあるフィオルシェーナではあるが、十年単位での異常に気づかなかったことは、これまでなかった。

精霊たちが積極的に話そうとしないということは、その地において、彼らにとって望ましくない事態が生じていることを意味する。

これまで、そうしたことは何度かあった。

フィオルシェーナはそれに気づく度に、渋る精霊たちを説き伏せ、事情を聞き出してきたものだが……今回は、そのことに気づくのが遅れた。

理由は……他に、一心に見つめる対象があったからだ。

この地から、さらに北部に広がる大国――アストニア皇国の首都エセル・プラウニカに、二十五年前に生を受けた『人間の子』に、ずっと彼女の意識は奪われ続けてきたのだ。

眩い陽光を思わせる金の髪、白磁の肌、紫水晶の瞳――優雅な四肢、卓越した頭脳……数多くの美質に恵まれ、健やかな成長を見せるかの国の皇子――ファナルシーズに、フィオルシェーナの意識は捕らわれ続けてきた。

彼が――かつての彼女の恋人であるリアンリードの生まれ変わりであるからこそ。

手を伸ばすつもりはなく、触れようなどとは欠片も思わず――それでも、生まれ変わってくれたその魂を宿すひとの生涯を、ただただ見守りたくて……一瞬でも見逃したくなくて。

夢中で、見つめ続けていた。

彼女を慕う精霊たちは、率先してファナルシーズの様子を調べてくれて、けれど精霊は往々にして、厚意を抱く相手に対しては過分なまでの恵みをもたらすことを身をもって知るだけ

に、決して干渉しすぎないようにと言い含め、そうしてもたらされるファナルシーズに関する知らせを、零れんばかりの笑顔で迎えた。

嬉しかったのだ、楽しかったのだ。

決して触れあうことは望まなかったけれど、それでもかつて恋人であったひとの魂が、再びこの世に生を受け、今度こそ人間としての時をその足で踏みしめていく……。

その有りようを、一瞬でも見逃したくはないと思い——結果として、いつもであれば気づいて当然のことを見落としてしまった。

精霊たちは、自分たち柱神を慕い、愛するがゆえに、時として不快を覚えさせるやもしれぬと判断した情報を、あえて伝えぬことがあることを。

つまりは、そういうことなのだ。

自分が個人的な歓びに浸り、心の赴くがままに行動している間に、アズアーダでは異変が生じていたのだ。

気づけなかったのは、迂闊としか言いようがない。

（確かめなければ……）

精霊たちが自分に告げず、今となっては告げたくないとまで思っている事態が、恐らくアズアーダの中心で起こっている。

遷都を強硬にでも、推し進めなければならないと、今の国王が決意せざるを得ないほどのな

にかが。

その際、フィオルシェーナにどうあっても同行して欲しいと願わずにおれぬなにかが。

（本当に、わたしはどこまでも、あのひとに及ばない……）

今更気づいたところで、なにができるかはわからないものの――それでも、できる限りの手は打つべきだろう。

そう思い、フィオルシェーナは動きやすい衣装に着替えながら、声に出すことなく、神宝『冬星』とはまた違う意味で、己が半身とも呼ぶべき幻鳥『雪月羽』のたったひとつの名を唇に乗せた。

「……【雪白】……」

六花の羽毛を散らしながら、彼女の呼び声に応じ、舞い降りた幻鳥の首を、愛しげに抱きしめた後、フィオルシェーナはその背に移動した。

風霊をはじめとする、近辺の精霊たちがこぞって引き留める。

――三位さま！　お待ちになって！

――なにもありません、三位さまが自ら足を運ばれるようなことはなにも！

――フィオ！【一位さま】はどうするの!?　今日もいらっしゃるはずじゃないの!?

皆が皆、止めようとする。

その態度こそが、アズアーダで『何か』が起こっている、揺るがぬ証拠としか思えず、彼女

は叫ぶように【雪白】に命じた。
「……アズアーダへ――っ！」

◈　◈　◈

ここ最近、常に感じる空気とは異なる何かを感じ取り、ファナルシーズはそっと首を傾げた。
アズアーダの北――『針の森』の一画……ここのところ、訪れる度に待ち受けている精霊の姿がない。
結界の境で、侵入者を止める役目を持つ彼らは、しかしファナルシーズに対してはその役目を果たせない。しかし、現在その結界を保つ、奥に位置する屋敷の主が、「誰であれ、予告なく敷地内に足を踏み入れた侵入者には相応の報いを」との命を発したがため、精霊たちは微笑ましい『報い』――悪戯というほうが相応しいが――を与えるのに苦心惨憺していた。
彼を先に進ませないために、小さなつむじ風を起こしてみたり、にわか雨を降らせてみたり、鉄砲水を起こしてみたり……などなど、工夫を凝らしてはみたものの、相手はもともとが主であったひと――しかも、一度『人間の子』として転生したとはいえ、今では同じ柱神へと変じた身だ。

笑顔で受け流されてしまう。

そこで諦めてくれるなら、ある意味簡単だったのだが、『針の森』の精霊たちは、森の主を愛するがゆえに、どこまでも不屈の精神を発揮する強者だった。

森の主たるフィオルシェーナが、『お引き取りを』と言った瞬間、精霊たちはこぞってファナルシーズを追い出しにかかる——訪れた際は、大歓迎してくれるくせに、だ。

だから、すぐに彼は常とは違うなにかに気がついた。

（精霊の気配が……いつもと違う？　奥に行くほどいつもなら険しい気配を放っているものだけれど……今日のは、少し……？　いや、なにかが絶対的に、違う……？）

感じた違和感——しかし、その正体を見極めるより先に、相手に声をかけられた。

「ご機嫌よう、雷皇の君？」

人を食ったような笑顔で、気配も感じさせず、彼の正面に現れ、自己紹介を為したのは、初めて会う女性の……柱神だった。

その髪は燃え上がる炎の如き緋色、肌は健康的な小麦色、最も印象的なのは、神の力を宿す瞳——そこに宿る髪以上に鮮やかな緋の色彩が、彼女の属性を物語る。

（緋属の柱神だ）

季節属性は、夏。

季節属性が冬である紫属の自分とは——フィオルシェーナにも同じことが言えるわけだが

――対極の位置にある存在と言える。

「ご機嫌よう、美しい夏の御方」

相応の敬意を以て、挨拶の言葉を口にする。

会いたいのも言葉を交わしたいのも目の前の女性ではなかったが、彼女を突破、もしくは懐柔しない限り、先に進めそうにないことは、さすがにわかったからである。

しかし、緋色の髪の女性は、思いがけないことを告げた。

「彼女なら留守よ。わたしは留守を預かったの……立ち話もなんだから、屋敷でお茶でも付き合ってくださらない？」

位階をすでに得ているだろうに、随分気さくな口ぶりである。

「よろしいのですか、わたしは立ち入りを禁じられているのですが……？」

苦笑混じりに問い返すと、緋色の柱神は肩を竦めた。

「今更なことを……まあ、彼女がすぐに戻るのであれば、機会を改める必要はあると思うけれど。どちらにしても、留守中のことは一任されているの。わたしが何方を招こうが、彼女は咎めやしないわ。そういう約束だから」

つまり、それだけフィオルシェーナと親しくしているということなのだろう。

その外見はさながら炎と雪――対照的な美貌のふたりは、並び立てばさぞかし互いを引き立てあうことだろう。

「魅力的なお話ですが、いまのわたしは愛する方に心の真を信じていただくために通う身ですから……」

遠慮しておきましょう――。

そう答えると、一瞬相手は目を瞠り、それからくすくすと笑い出した。

「紳士でいらっしゃるのね。けれど、わたしはどうしても貴方にお尋ねしたいことがあるの。どちらにせよ、屋敷中の精霊たちが潔白の証を立ててくれるでしょうから、気にする必要はないわ。どこの誰に聞かれるかもわからない場所では、到底できる話ではないのですもの」

話というのが、フィオルシェーナに関することだとは、すぐにわかった。

そうである以上、ファナルシーズに否やがあろうはずがない。

「伺いましょう」

うなずくと、緋髪の美女は満足げに微笑んだ。

◇　◇　◇

勝手知ったる他人の家――とばかりに、招いた客人に茶を供しながら、ワン・ヤーンは不躾にならない程度に、件の青年を観察した。

見事な金の髪に白皙、優美にして優雅な美貌は、もともとが『人間の子』であったのが嘘の

ような完璧さである。

立ち居振る舞いは洗練されており、隙というものが一切ない。

（千年を超えて生きた御柱が転生したと聞いた時には、フィオナが失望しなければいいと心配したものだけれど……これは、彼女には悪いけれど、人間として生きていくほうが大変だったに違いない御仁だわね）

ワン・ヤーンは、フィオルシェーナの恋人であったリアンリードのことを直接は知らない。絵姿を目にしたことがあるだけだったが、目の前の青年は、その姿に見劣りしない美貌と空気を纏っている。

（以前はまるで夜の化身……此度は太陽さながら、ね。どちらにしても、フィオナと並ぶためのようなお姿だこと）

夜と月――太陽と月。

どちらも月たるフィオルシェーナをこの上なく引き立てることだろう。

そんなことを思っていると、青年――ファナルシーズが苦笑する気配が伝わってきた。

「観察は、お済みですか？」

その容姿と立場ゆえに、幼いころから他人の目にさらされることには慣れているのだろうが、緋属の第五位たる自分の視線に、全く動じないあたり、相当な胆力だとワン・ヤーンは感心した。

「おかげさまで……大まかに、ですけど。大変目に楽しい御方で嬉しく思いますわ。男も女も顔ではないとは言いましても、やはり見目も良いに越したことはありませんもの。特に彼女の隣に立つ殿方となれば、とびきりの御方でなければ到底許せませんわ」

人を食った言葉に、ファナルシーズがますます苦笑を深める。

「……未だ、近づくことさえ許してはいただけませんが」

深い響きを伴う、魅惑的な声だった。

この声で甘く囁かれ続けて、心が傾かない者がいるとは思えない——それは、恐らく彼本人にもわかっているのだろう。

（つまり、彼女の心を得ることは、彼にとってはすでに決定事項というわけね）

頼もしいことである。

だが、その前に、ひとつだけ確かめておかなければならない。

「……お尋ねしてもよろしい？」

どう斬り込むべきか、考えながらの問いに、ファナルシーズは柔らかな微笑でうなずいた。

「なんなりと」

「お国には、奥様とお子様がおいでと伺いました。ご家族も、北の大国の玉座も捨てた、その真意をお聞きしても？」

答えなど、聞かずともわかってはいるけれど。

それでも最初に確かめておかなければ話が進まない。
「月に……手が届くと、知ってしまいましたから」
誰のことかは聞くまでもない。
そうして――だからこそ、知りたいことが、ある。
「月に……恋していらっしゃる？」
「ええ。夢で、初めて目にした瞬間から……」
「それは、前世からの絆ゆえに……？」
彼には前世の――リアンリードであったころの記憶があると聞いた。
その思いの延長で、月たるフィオルシェーナに恋したのだろうか。
（だとしたら、難しいかもしれない）
たとえ同じ魂を抱いてはいても、リアンリードとファナルシーズは違う存在なのだから。リアンリードの記憶を下敷きに、時を重ねた時点で、やはり違うものに変わってしまったに違いないのだから。
もしもこの青年が、魂が同一であることを、愛される根拠として捉えているのなら、それは間違っているとしか言いようがない。だから、そこのところを知っておきたいのだ。
しかし、ワン・ヤーンの懸念を知ってか知らずか、ファナルシーズはゆっくりと、しかしきっぱりとかぶりを振った。

「前世のわたしが、彼女に近しかったおかげで、記憶にある彼女の姿を夢に見ることがかなったのですから、確かにそれは絆ゆえと言えるかもしれませんが……夢のなかの男が、なにを考えていたのか、わたしにはわかりません。わたしに刻まれた記憶とは、あくまで情報としての映像であり声であり香りに過ぎず、感情は伴ってはいないのですよ。だから、わたしはあの月を知って以来、夢のなかの男が憎らしくてたまらなかった……彼女に触れているのは、わたしにとっては、あくまで他人だったわけですから」

その言葉に、ワン・ヤーンはほっと安堵の息をついた。

次いで、青年の子供っぽさの残る言葉に笑みを噛みしめる。自分だと認識できない以上、彼にとってリアンリードは憎い恋敵にすぎないと、言っているも同然だった。

(彼は、別人だとわかっている……それならいい。それなら、いいわ……)

同じであろうなどと無理を重ねても、生じるのは歪みのみだから——それはいずれ、破綻を来す。

違うという認識こそが、必要不可欠な要素なのだ。

「……ならば、わたしは応援させてもらいましょう。あなたなら、彼女の隣に申し分ないと思えるから」

くすくす笑いながらそう告げると、ファナルシーズは一瞬驚いた顔になり、すぐに嬉しそうな笑みを浮かべた。

「ありがとうございます」

「麗しい殿方に感謝されるというのもいいものね。それではひとつ、彼女の心を得る早道を教えてさしあげましょう。一度、彼女を怒らせてみるといいわ」

突拍子もないことを聞いたと言わんばかりに、ファナルシーズの目が大きく瞠られる。

「……わたしは、あの方に万に一つも嫌われたくはないのですが」

「本音を引き出すには、怒らせるのが効果的でしょう？　一度ぶつけさせれば、彼女がなにこだわっているかもはっきりするし……言っておきますけど、彼女自身、そのこだわりが何であるのか薄々としかわかっていないの、上手に聞き出すなんてことは無理よ」

そう、フィオルシェーナは――ただ一度の恋のみを抱きしめてきた彼女は、恋の持つ暗い一面をほとんど知らずに過ごしてきた。

嫉妬や疑惑は、かつての彼女の恋には存在しなかった。だから、それらの存在に気づかない……いや、半ば気づいているとしても、認めたがらないでいる。

（使いようによっては、良いスパイスになるのだけれど……まあ、フィオナには言っても無理でしょうね）

駆け引きを楽しめるような女性ではないのだから。

「頑張ってくださいね」

親友の幸福な恋のために、ワン・ヤーンは心から、そう告げた。

「頑張らせていただきましょう」
流れる金の髪を優雅にかきあげ、ファナルシーズは蠱惑的な笑顔でそう答えた。
未来は美しく、幸福なものだと――。
この時のワン・ヤーンは信じて疑わなかった。

4　祓えぬ黒煙

重い体を引きずるようにして、フィオルシェーナは自室の長椅子に倒れ込んだ。
ずきずきと頭が痛む。
だが、それ以上に痛むのは胸の奥だ。
目にした光景が、脳裏に焼き付いて離れない――アズアーダの首都サリアネナに渦巻く、最早浄化不可能なまでに凝縮した人々の恨みの念が作り出した黒雲が。
（なぜ、あんなことに……）
思い出すだけで、吐き気と嗚咽が溢れだしそうになる。
精霊たちが近づこうとしないのも道理だ。
アズアーダの首都は、あまりにも理不尽な殺戮によって、生者と死者の怨念で凝り固まった邪気が街全体を覆い尽くしていた。
ここ二十数年の間に――。
それは、現国王マナナークの度を超えた粛清がもたらしたものだった。

生まれながらに王冠を与えられたマナナークは、頭を抑えていた摂政と母太后が相次ぐ死を遂げると同時に、心のままに政治を執り行い始めたのだという。

それが、正しい方向に向いたものであったなら、何の問題もなかったろう。政治指針の違う『目の上の瘤』がいなくなったために、彼本来が望んでいた政治を推し進めたというのなら。そうであれば、多少の失敗があろうと、周囲が補い、支えることで国は動いていく。

だが、長年厳しく抑えつけられてきたマナナークは、頭上の重石がなくなった瞬間、それまで抑圧されてきた自我を押し通すことにこそ夢中になったのだ。

気に入らぬ臣下は退け、排除する。

赤心を以て諫言する臣下も同じ。

やがて、甘言を囁く者しかそばには置かぬようになり、彼らの言葉を鵜呑みにして次々に心ある貴族や官吏を粛清した。

当然のことながら、国は乱れ、罪もない民は飢えと病に塗炭の苦しみを強いられる。

故なく命を摘まれた者たちの無念、罪なく殺された者たちの恨み、残された遺族の悲しみと憎悪――そして、肥大して留まるところを知らぬ権力者たちの欲望。

負の感情が絡み合い、複雑に混ざり合った念が作り上げた黒雲は、すでに神官たちの手に負えるような代物ではなくなっていた。

（あれほどに絡み合った念……最高位の神官が十人がかりでも、祓えるかどうか……たとえ成

功したとしても、まず間違いなく、何人かは命を落とす……）

けれど、それは『人間の子』であれば、の話だ。

柱神であれば――話は違ってくる。

神籍に連なる身であれば、負担はかかっても、命を落とすほどのことにはならない――確実に寿命は縮まることになるだろうが。

マナナークが。

己が為した罪を認め、『空を支えること』こそが柱神の本分だと理解した上で、それでも民のために身勝手を承知で、フィオルシェーナに助力を求めてきてくれたなら……どれほどよかったろう。

もしそうであったなら、自分はきっと、地面に頭をこすりつけてでも、友人たちに協力を頼み、アズアーダに巣くう念の浄化に粉骨砕身しただろう。

けれど、マナナークが選んだのは、すでに神殿にも手に負えない念の黒雲に覆われてしまった首都を見捨て、自分たちだけが安全な土地に逃れる道。しかも、フィオルシェーナを伴うことで、新たな首都の恵みだけは確保しようという……あまりにも身勝手な選択だった。

到底、応えられるはずがない。

（けれど……あの黒雲だけは、なんとかしなければ……）

あれはすでに、意志にも似たものを宿しつつある。

弱った者が触れれば、生きる意志ごと奪い取られかねない上に、負の念を抱える者には、さらにそれを強める効果をもたらし始めている。
放っておけば、念は念を呼び、さらに増殖しかねない。
あんなモノに覆い尽くされてしまったら、到底ひとは生きていけない。
問題は――ひとつ。
（わたしの力だけで、可能なことかどうか……）
恐らくは、可能だろう、と見てきたばかりの街の空を思い出し、判断する。
（命を、惜しみさえしなければ……）
と、そう考えて――不意に思った。
（それもいいかもしれない）
と。
あの複雑に絡まり合った暗黒の念を解し、浄化することを、自分の最後の務めに選んで、どうしていけないことがあるだろう？
幸いにも、今自分の手元には、新たな同胞を選ぶ神宝は預けられてはいない。長老の一員として、果たさねばならない務めは負ってはいない。
先達として、若年の同胞を導く務めに関しては、途中で放棄することになってしまうが、それでもあの黒雲を放置しておくことを考えれば、誰にも非難は受けないはずだ。

そもそも、あれを見逃していた責任は、確かに自分にあるのだから。
それがいい、とフィオルシェーナは思った。
自分が死ねば……少なくとも、もう『彼』と対峙せずにすむ。
ファナルシーズ。
愛しい恋人の生まれ変わり——夜の化身のようだったひとが、太陽の化身として甦った。
その差は大きすぎて、間近に見るのはあまりに辛い。
せめて、『人間の子』として生涯を終えてくれたなら、こんな苦しい思いは味わわずにすんだはずだと思うと、彼も彼を選んだ【紫雷】も、【紫雷】を彼にもたらした若い柱神さえも、憎らしく思えてくる。
(そう……『人間の子』として生きてくれたら、わたしの心が波打つことはなかったのに)
妻を娶り、子を生し、老い——家族に看取られ、幸福な一生を終える。
そんな姿であれば、何の苦痛もなく見守ることができたのだ。
彼が、人間として生きる道を捨て、新たな生を歩み出すために……そのために必要なこととはいえ、自分ではない別の……。
唐突にせりあがってきた嘔吐感に、フィオルシェーナは両手で口元を覆った。
堪えきれそうにない。
慌てて洗面室に駆け込んだ彼女は、アズアーダの毒気にあてられたせいもあってか、胃の腑

の中身を全て吐きだした。
（苦しい……）
生理的な涙を流しながら、心を占める思いはただひとつ――。
（苦しくて、仕方ない……）
けれど、心が「どうして？」と疑問を浮かべることはなかった。
何とか人心地ついたところで、フィオルシェーナはよろよろと立ち上がった。
食事ができそうにない以上、今の自分に必要なのは、休息しかないとわかっていた。
すぐにでも寝室に向かいたいところだったが、玄関の施錠がまだだった。
常であれば、精霊たちの守護を頼りに、鍵にこだわる必要はないのだが、いかんせん今は状況が複雑で、施錠と精霊たちへの『言いつけ』は必要だった。
こんな姿を、彼には……ファナルシーズにだけは見られたくはなかったから。
自分の身を気遣う精霊たちに、決して自分が目覚めるまで、誰も屋敷に迎えてはならないと、玄関まで歩く間にきつく命じたのも、理由は同じだった。
しかし、時の女神は、思いもかけぬ機を見計らったかのような悪戯を仕掛ける。
玄関の扉に施錠するために、フィオルシェーナがその手を伸ばした瞬間――。
扉は、外から開かれた。
飛び込んできたのは――。

（ああ……なぜ、よりにもよって……！）

声にならない絶望の呻きを、フィオルシェーナが洩らしたとも知らず、扉の向こうから現れた太陽の化身は、彼女を一目見るなり顔色を変えた。

「月姫？」

ぎょっとしたように、青年の紫水晶の瞳が大きく見開かれた。

その美しい鏡のなかに、フィオルシェーナは窶れた自らの顔を認めた。

青年の美しすぎる顔が、苦しげに歪む。

「月姫……月姫、一体どうなさったのです？　なにがあったというのです……？」

宝石以上に美しい、至宝の双眸に浮かぶ光は、ただひたすらにこの身を案じる慈しみのそれ――伸ばされた腕の意図も、そうだとわかっていた。

わかっていた、のに……。

反射的に、彼女は。

差し伸べられた優しい腕を――思い切り、払いのけた。

「触らないで！」

考えるより先に、唇から迸った叫びは拒絶。

「月姫……？」

唐突な彼女の反応に、戸惑いを見せるファナルシーズに、その時ばかりは気遣いすらも忘れ

て、彼女は感情のままに叫んでいた。
「他の方に触れた手で……わたしに触れないで！」
砕けた器は元には戻らない。
零れた水は零れたまま。
そして――。
一度放たれた言葉の矢は、決して引き戻すことはできない。
取り返しのつかない瞬間が、確かにこの時、ふたりの間に生じたのである――。

◇◇◇

悟ってしまった。
自覚してしまった。
自らの内に隠れていた、浅ましい想いを。
（わたしは……）
寝台に身を投げ出し、フィオルシェーナは声もなく慟哭した。
（妬んだのだわ……彼に愛された女性たちのことを）
身の置き場もないほどの羞恥を覚えた。

責める権利など、元からないのに。
そもそも『人間の子』としての、幸福な一生を願っていたはずだというのに。
そうと思い定めていたはずなのに――『彼』が政略上とはいえ、妻となる女性を迎えた時、心が軋んだ。
子供が生まれた時、喜ばしいことのはずなのに、声を上げることさえできなかった。
言祝いであげるべきだと、わかっていたのに……どうしても、できなかった。
けれど、わからないふりで、わからない顔を通した。
認めるのは、苦しすぎたから。
彼とは二度と触れあえぬ定めだと思っていたから。
そうあってほしいと、心から願う思いに嘘はなかったけれど――彼が、運命や自分たちの裏を掻いた形で、それまでとは違う存在として……生まれ変わった姿を顕した時、心のどこかが、確かな歓喜を叫んだのだと思う。
彼は、かつての彼ではない。
姿が違う。
声が違う。
眼差しも匂いも……きっと、ほかにもさまざまな違いが見つかるはず。
けれど、フィオルシェーナにとって、彼が彼であることに変わりはないのだ。

変わらず愛しく大切な、かけがえのない存在……。
だから、これ以上は知りたくなかったのだ。
ファナルシーズがリアンリードと違うところを。
同時に、知りたくて堪らなかった。
ファナルシーズとリアンリードの同じところを。
だから、拒んだ。そのくせ、拒みきれずに何度もファナルシーズの訪いを許した。
リアンリードとファナルシーズ、そのどちらを、どんな形で望んでいるのか、もう自分でもわからない。
わからないから、拒むことはできず、わからないから、受け入れることもできずに――ここまで、来てしまったけれど。
――頃合いだわ。
見つけた、最期を迎えるに相応しい状況を。
ならば、それもいいのではないか、と思える。
（少なくとも、アズアーダの黒雲を祓うことはできるのだし……）
それで充分ではないだろうか。
（これ以上は耐えたく……我慢したくない。同じなのだか違うのだか、いくら考えてもわからないあのひとのことばかり考えるだなんて……）

そんな人生、絶対にご免だ。

だから、ここはやはり、初志を貫く形で――。

と、そう思ったときのことだった。

その『初志』を挫くような、少女の悲鳴が聞こえてきたのは。

「結界を緩めたの？」

あくまで確認を取るために、投げかけられた問いに、精霊たちが揃ってかぶりを振るのを目にし、フィオルシェーナはくしゃくしゃに顔を顰めた。

「……酷いわ。最後の大仕事をようやく見つけた気になったのに……こんな邪魔が入るだなんて」

ひどいわ、ひどいわ――子供に返ったかのように、フィオルシェーナはそう繰り返した。

後は最期の時を迎えるだけだと、心の奥のどこかでそう、感じていたからかもしれなかった。

けれど、その謎は秘められたまま――。

その娘――エセルシノは、アズアーダの首都サリアネナに屋敷を構える中流貴族の娘だった。

茶褐色の巻き毛に、榛の瞳――やや上を向いた高くはない鼻が愛らしいと言われるだけの、

取り立てて注目を浴びるわけでもない目立たない娘だった。

身の回りの世話をする小間使いはいたけれど、王侯貴族のように、なにもかも面倒を見てもらうようなことはなかった。ある程度は自分でなんとかしなければ、とても屋敷の人手が足りないのだ。

おかげで、貴族の娘としては、いささか生活能力に長けてしまった彼女だが、そのことを嘆くことはなかった。

殊に、最近のサリアネナの状況を鑑みるだに、財を蓄えるより、賢く生き抜くための知識のほうが重要だと思えるだけに、率先して自分のことぐらいは自分でできるよう、頑張ってきたつもりだ。

そう……あくまで、その『つもり』――現実には、何の役にも立ちはしない。

（踵の高い靴でどれだけ長く耐えられるかの限界に挑戦する暇があったら、歩きやすい踵の低い靴の一足でも作っておくのだった……）

走るのに向かない踵の高い靴は、すでに脱げてしまっている。

ドレスの裾を引き裂いて、足に巻きつけはしたものの、柔らかすぎる足の裏は、傷こそないがもう痛みすら感じられないほどに麻痺してしまった。

足が、重い。

まるで泥の中を歩いているかのようだ。

（こんなことになると知っていたら、日に焼けてそばかすができるのなんて構わずに、一日中でも走り回れるぐらい、外を出歩いておくのだった！）

年頃なのだからと、周りに言われるまま、室内にこもるようになったことが、今更ながらに悔やまれる。

（淑女らしくないと言われても、真っ黒に日焼けしたとしても！　いま、こんな風にのろのろとしか歩けないぐらいなら、そちらのほうがよかった！）

一刻も、猶予はないというのに。

急がなければ、大切な家族の命が消えてしまうというのに！

（なぜ、この足は、こんなにも重いの？）

役に立たないこんな足など、今すぐ切り落とし、もっと立派なそれと取り替えてしまいたい。

（ああ、まだ……まだ見えないの？　御柱さまのお屋敷は、まだ……？）

深い、深い森の中、エセルシノはただそれだけを求めて視線を彷徨わせた。

声を上げることはできない。

それは追っ手に自分の居場所を知らせることに他ならないから。家族の中で、ただひとり捕縛から逃れた自分を、役人が追って来ていることを、エセルシノは確信していた。

なぜなら、それはいつものことだったからだ。

苛烈にして残酷なマナナーク王――。

彼は罪を問うた相手の命を、その家族ごと奪い取る。ひとりとして目こぼししたりはしない――後に禍根を残さぬために、徹底的に追い詰め、狩り尽くす。

（御柱さま！　どうか、兄さまを……父さまを母さまをお救いください！　兄さまは、神官として求められた意見を口にしただけです！　苦しむ皆のことを、思いやってくださるよう、陛下にお願いしただけです！　なのに、それだけで殺されるだなんて……あんまりです、御柱さま！）

大声で叫びたいこと――けれど、状況的にも体力的にも、それはかなわない。

（お助けください、お助けください、お助けください……神さま！）

かなわぬ願いだと、半ば諦めつつも、どうしても捨てきれない一縷の希望に縋って、この森を目指した。

アズアーダをずっと見守りつづけてきたという、美しい御柱が住むと伝えられる――この『針の森』を。

追われて逃げて、何度も転んで、何度も隠れて。

すでに手足は傷だらけ、服を脱げば、きっと体のあちこちに、痣ができているだろう――ばらばらになりそうなほど、どこもかしこもが痛い。

それでも諦め、足を止めることだけはできなかった。

（御柱さま……神さま……）

目がかすむ。

求める屋敷の影は、まだ見えない。

（まだ……？　それとも、やはり……？）

疲労は極限に達していた。

頭がもう、うまく働いてくれない。

（御柱さまは……会ってはくださらない……？）

自分たちを救ってはもらえないのか……？

ぼんやりとした思考が、絶望へと傾きかけたまさにその時――。

背後で、かさりと、枯れ葉を踏む足音が聞こえた。

はっとして振り返ったエセルシノは、視線の先に死神の姿を認め、凍りついた。

警邏隊とは名ばかりの、人狩り集団が身につける紫紺の制服――それを纏った男がふたり、勝ち誇ったように笑って彼女を見つめていた。

絶望が、全身を駆け抜ける。

「いやぁぁっ！」

エセルシノの悲痛な声が、『針の森』にこだました――。

5　氾濫する月光——乱反射

絶望が心と体を締め上げた。
現れた狩人の衣装を纏うふたりの男の姿を目にした途端、エセルシノは目に見えぬ鎖に縛られ、身動きひとつ取れなくなった。
（お終い……）
終止符。
結末。
最後。
未来へ繋がることのない、いくつもの言葉が脳裏を駆けめぐる。
思わず上げた悲鳴すら、それを押しとどめる力とはならない。
（ああ……）
お終い、終止符、結末、最後。
救いがもたらされることは、ない。

恐怖すら、すでに覚えぬ絶望の淵に立たされ、エセルシノは男たちをぼんやりと見つめた。

顔は、知らない。

だが、何度も見知った目をしていた。獲物を追い詰めた、残酷な愉悦をたたえたその瞳を、彼女は何度も目にしたことがある。

サリアネナの街角で、貧しさゆえに些細な罪を犯した子供を、こんな目をした男たちが、いたぶりながら捕らえていた。

それを見ながら、なにもしなかった自分。

巻き込まれることを恐れ、震えてただ見守っていた臆病の罪が、きっと今問われているのだ……この身が、獲物と見なされることによって。

「シャライネ子爵令嬢エセルシノ？」

確認を取るというよりは、その正体を知っている事実を明らかにすることで、彼女を嬲る――その意図のほうが大きく感じられる声音と口調で問いかけられた。

否定は無意味だ。

どちらにしても、彼らはエセルシノを捕縛し、その名を聞き出すために手段を選ばないだろうから。

あるいは、彼らにとっては、エセルシノがエセルシノであることすらも意味がないのかもしれない。

『シャライネ子爵令嬢エセルシノ？』

という問いに、うなずく存在さえいれば――それを捕らえさえすれば、彼らの務めは終わるのだから。

違う、と言いたい。そうして、何とか彼らから逃れるための隙を見つけたい。

けれど、それが限りなく不可能に近いこともわかっている。

男たちの鍛え上げられた体軀を見れば、すでにぼろぼろの自分がかなうはずがないと……それは、考えるまでもないこと。

それでも。

自ら諦め、縛につくことだけは、どうしても受け入れることができない――もう、足は一歩も動かせそうにないのに。逃げることなど、物理的に無理だとわかっているのに、それでも。

（神さま……！）

このぎりぎりの状況にあって、なおも救いを求める心は愚かなのか、それとも醜悪なのだろうか？

わからないまま、それでも『認めたら最後』だとわかっているから、もう絞り出すこともできない声の代わりにかぶりを振った。

男たちの唇に、冷笑が浮かぶ。

（悪あがきを）

と、思っているのが如実にわかるその笑みを目の当たりにしても、どうしても譲れない——捕縛の決定的証拠を自ら与える行為だけはできないという思いがあって、エセルシノは力なく再びかぶりを振った。

だが——それでも、もう捕まるのは時間の問題だった。

絶望に染まった諦念が、心を染め尽くそうとしていた、まさにその時——。

エセルシノは、女神の声を聞いた。

「わたくしの森で、なにをなさっておいでです？」

凛とした清涼な。

どこまでも響き、伝わりそうな——それでいて、決して大きくはない美しい声音。

男たちの瞳に、驚愕の色が宿った。

ちらりと視界の隅でその事実を確認し得たのは、エセルシノもまた声が聞こえると同時に心のままに振り向いたからだった。

彼女の背後——鬱蒼とした緑が覆い尽くす森のなか。

いったいどのような魔法を用いたものか……突然現れたそのひとは。

そのひとの姿を目にした者が、他に言葉を選びようがない存在感と威厳をたたえ、こちらを見据えていた。

月の化身——。

そうとしか言い表しようがない美と力と静けさを纏い、『針の森』の女神は佇んでいた。

◇　◇　◇

フィオルシェーナの耳にではなく、心に届いたのは、未だ幼いと言ってもいい少女の悲痛なまでの『命』を願う思いであり声だった。

死にたくないと、どこまでも強く思うその根幹にあるのは、自分の死が、そのまま大切なひとたちのそれを招くと知るがゆえに、どうあっても死ねないと……そう思っているのが伝わってきて、フィオルシェーナは動かずにはいられなかった。

たとえ、どれほど関わり合いたくないと思う相手であろうとも。

（この気配……忘れられない……）

先日、アズアーダの首都を見てきた際、イヤというほどに嫌悪とともに感じ取ったものだった。

役人とは名ばかりの、正気を失した国王の走狗。

国内の治安を守るために志願した者のなかには、深い葛藤と軋轢に悩まされている者もいたようだが、この男たちは、違う。

走狗たることを、楽しんでいる。

覚えた嫌悪のままに、フィオルシェーナは追い詰められていた少女の前に降り立ち、狩人気取りの男たちを睥睨した。

「ここは、『針の森』……『人間の子』が……あなた方が主と認める方が、どう認識しているのかは知りませんが、ここはわたくしの……神の地です」

傲慢なまでの誇りと怒りを放ちつつ、フィオルシェーナは言い放った。

自らの持つ『神の気配』を、このような時、彼女は出し惜しみすることはない。

叩きつけ、相手を屈服させてでも、望みを果たす――それは、まさに『神』ならではの傲慢さだ。

わかっていて、それでもフィオルシェーナは行使する。

滅多にはないことだったけれど。

その滅多にしないことをするだけの怒りを、フィオルシェーナは感じていたのだ。

王都サリアネナの惨状は、彼女の怒りを掻き立てるには充分すぎるほどの悲惨さを呈していた。

あれを、作り上げた国王マナナークへの。

止め得なかった、結果として協力した臣下たちへの。

なにより気づかず、見過ごしてしまった自分自身への。

尽きせぬ怒りが、いま彼女を支配していた。

その怒りを纏う姿が、圧倒的な迫力と美に包まれていることを、彼女は気づいてはいなかった。

「お退きなさい」

短く告げると、ふたりの男は従った。

否、抗う意志ごと封じられ、操り人形のごとく、ただ彼女の言葉に添う動きを示したのだ。

力を信じる者は、より強い力を前にしたとき、容易くくずおれ、その前に屈服する。

僅かな心理的抵抗を見せながら、男たちがのろのろと後退していく。

内心の安堵を隠しながら、それでもようやく、フィオルシェーナは自分に救いを求めてきた相手を見つめることができた。

怯え、震えながら、けれど足を止めることがなかった娘――「死にたくない」という自らの願いに、親しい、幾人もの命に対して「死なせたくない」と……自覚もなく、同じほどの強さで重ね合わせていた娘。

それは、どこか過去の自分を思い出させる。

自分は、結局、ほかの誰も救うことはできなかったけれど。

せめて、この娘の思いは叶えてやりたい――。

そう思い、だからこそ呼びかけた。

「おいでなさい」

と。

少女は呆然とした面持ちから表情を取り戻し、のろのろと足に力をこめ、震えるそれで、それでもこちらに近づこうと、した。

だが、その瞬間——新たな闖入者が現れ、少女の動きは阻まれた。

しゅるり、と空を切って少女の細い喉に巻きついたのは、革の細くしなやかな鞭。

はっと、息を呑んだ。

「誰です！」

鋭い声で誰何する。

影のような、かそかな気配を放つだけの影としか思えぬ人影が、木立の間から現れた。

「何者です？」

問うと、答えの代わりに、嗤う気配が返される。

嘲る響きだ。

直感する——先ほどの男たちとは違う、と。

この新たに現れた男たちは、この身に、この声に臆することはないだろうと。

焦燥が強くなる。

「その子を放しなさい。その子はわたくしの保護を求めて、ここを訪れた者……わたくしの保護下にある子です」

告げるが、少女の首にまきついた鞭は緩む気配を見せない。
「無視するつもりですか？」
声に冷ややかな響きをこめて、囁くように宣じると、相手のひとりが嗤いながら応えた。
「おかしなことを仰っているのは、貴女のほうでありましょう」
と。
男は少女の首にまきつけた鞭を引き寄せるのではなく、自らが近づいていくことで、少女に危害を与えているわけではないと示しながら、決してその拘束を解かぬことで、こちらの言い分に従うつもりもないことを言外に告げていた。
空気がざわり、と揺れる。
男の、フィオルシェーナに向ける嘲りにも似た気配に、精霊たちが怒りを覚え、その身を震わせたのだ。
（いけない）
背筋に、冷たいものが走る感覚に、フィオルシェーナは相手に気づかれないよう、こぶしをにぎりしめた。
精霊たちが、感情のままに暴れようとしている。
このままでは、自分はともかく、あの少女も男たちも無事にはすまない。抑えなければならなかった。

しかし――。

そんな彼女の努力を嘲るように、男が口にした一言が、嵐を引き寄せた。

「神たる者は現世には関わらぬが天の定めし法のはず！　法に従い、神たる世界へ戻られるがよろしかろう！」

それは、フィオルシェーナの記憶と意識――その両方を揺さぶる言葉だった。

神の世に属する者は、人間の世に関わるな――そう告げるも同然の言葉に、彼女は強い衝撃を受けた。

かつて、自分は人の世に少なからぬ影響を持つ家の子供として生まれた。政争に敗れたがゆえに逃れ、その果てに命を落としかけた。

それを救ってくれたのが、リアンリードだった。

彼に命を救われ、庇護下に置かれて育てられ……そうして今の自分がある。

男たちが言うような、『神たる者の法』に縛られていたのなら、彼はきっと、命を落としかけた自分に手を差し伸べることはしなかったはずだ。

そうして、自分が今、柱神として存在することも。

男の言葉は、リアンリードが自分を救ったという選択も、そして今自分が生きて存在しているという現実も、さらには目の前で命を摘まれそうになっている少女の命を救うために手を差し伸べる行為すら、完全に否定するものだった。

少なくとも、その時のフィオルシェーナには、そうとしか思えなかった。
逆鱗とは、まさにこのこと。
全身を巡る血が、沸騰するかのような錯覚と、なにより誰より大切な、リアンリードを否定されたという怒りゆえに、男たちへ激情が溢れ出す。
（リアンがわたしを助けてくれたのが、神の法に反した……間違った行為だったというの？それで助かったわたしが今生きているのは正しくないことだというの？　聞こえた悲鳴に、矢も盾もたまらず駆けつけて、助けたいと思ってしまう、この心の動きが、間違っていると……そう言うの？）
爆発する感情が、すでに怒りに我を忘れかけていた精霊たちの歯止めを吹き飛ばす。
フィオルシェーナが怒りを向けた相手だけではなく、その地域全体を――救いたいと思った女性がいる場所まで含んで――焼き尽くすための力を揮う。
それが、落雷として、形を取る寸前に、フィオルシェーナは自らの感情の暴走がもたらすであろう恐ろしい『結果』に気づく。
リアンリードの選択を否定されたこと、自分が救われたことを否定されたも同然の言葉、ひとの嘆きや悲鳴に耳を貸すな――と言わんばかりに突きつけられた拒絶の意。
精霊たちが、そんな彼らに強烈な反発を抱かないはずがない。
そして、一瞬とはいえ、自分はそんな彼らの思いの流れを、紛れもなく肯定し、怒りゆえに

煽ることさえしたのだ。

（駄目……！）

自覚したが、それは一瞬遅かった。

視界の隅に、曇天に走る紫光が走った。

「駄目ぇっっ！」

叫びながら、フィオルシェーナは両腕を広げ、空から射られる光の矢の全てを、自ら引き寄せ、受け入れた。

降り注ぐ光矢。

貫かれ、大きすぎる衝撃に意識がはじけ飛ぶ。

その寸前、脳裏に浮かんだのはリアンリードではなくファナルシーズの顔だった――。

◇　◇　◇

大気中に精霊たちの怒りが溢れ出した瞬間、ファナルシーズは胸に言いようのない不安が広がるのを感じた。

怒りの中心に、愛する女性の波動があったからだ。

（月姫……!?）

なにが起こっているというのか。
だが、考えるより先に体が動いていた。
イヤな、予感がする。
一刻も早く駆けつけなければ、取り返しのつかないことが起こるという、奇妙な確信に駆り立てられ、ファナルシーズは『針の森』へと急ぐ。
精霊たちの怒りは大きくなるばかりだ——視界の隅、雲もない空にぴしり、と細い雷の光が走った時、彼の胸に湧いたのは恐怖。
間違いない……あれは、フィオルシェーナが持つ神の力。
優美でたおやかなその身の内に、いつもは隠れて気配すら見せない、紫属柱神のみが振るえる雷光矢……。
世の人間が『神の怒り』と呼ぶ恐るべき光だ。
それを、フィオルシェーナが今、放とうとしている。
誰に……何者に対して？
（敵……か？）
柱神たるフィオルシェーナに、害意を以て襲いかかった者がいたというのか？
（いいや……恐らくは、違う）
彼女に向けられた感情は敵意や殺意ではない——。

もし、そうした思いを叩きつけられたのなら、彼女の放つ感情には戦意が含まれていなければおかしい。そうしたものが一切感じられないということは――その意味するところは。

何者かが、フィオルシェーナの逆鱗に触れるなにかをしたのだ。

恐らくは、人間が。

（いけない、月姫）

怒りを向けられているであろう人間のためではなく、純粋にフィオルシェーナのために、止めなければならない、とファナルシーズは思った。

荒ぶる感情のままに力を放ち、相手を傷つけた時、より深い傷を負うのは彼女のほうだ。その心から血が流れるのを、どうして黙って見ていられよう。

精霊たちの怒りは収まる気配を見せない。

彼らの手を借りては、自分まで引きずられかねない――そんなことになったら、目も当てられない。

走って駆けつけるしかない。

決して遅くはないと自認する足の動きが焦れったいほどに遅く感じられる。

（速く……もっと速く！）

空に――今度は二本の光矢。

そして、一気に膨れあがる、精霊たちの怒気に、心臓がきりきりと締めつけられた。

（月姫！）

見えた。

数人の、立ちつくす男たちの姿、首に巻きついた鞭を、必死に外そうとしている少女――その場の全員の視線が向くその先に。

銀の髪を力という名の風に揺らしながら、圧倒的な存在感を漂わせながら、愛しい女性が佇んでいた。

増える光矢――暴れ狂う光の乱舞は、のたうちまわる巨竜を思わせる。

はっと、一瞬フィオルシェーナの気配が変化した。

迸るように、放たれた悲鳴が紡いだ言葉は。

「駄目ぇっっ！」

そうして彼女は、優美な両腕を大きく広げた。

（自分に集めるつもりだ……！）

恐ろしい確信に、ファナルシーズの心臓は凍りつく。

「駄目だ、月姫っ！」

制止の叫びは、しかし間に合わなかった。

紫の光矢が、次々にフィオルシェーナに向かって降り注ぐ！

「フィオルシェーナ！」

喪失の予感に、ファナルシーズは視界が闇に覆い尽くされるかと思った。

（させない……！）

そんなことを許せるはずがない。

「フィオルシェーナ！」

倒れた彼女に駆け寄った時、その唇が微かに震えるのを認め、ファナルシーズは最悪の事態は免れた安堵に息をついた。

愛しいひとは、朱に染まっていたけれど――。

命あることを、ファナルシーズは神に強く感謝した。

6　月が堕ちるとき

恐怖、安堵、悲嘆、怒り、憎悪――さまざまな感情が鬩ぎ合う心は、今にも軋りを上げ引き裂かれそうだった。

きつく唇を噛みしめることで、整理できない激情に支配されそうになる自らを戒め、ファナルシーズは、顔色なく立ちつくしている少女と男たちを見遣り、低く命じた。

「眠れ」

死ね――といっそ命じたいくらいだったが、それではフィオルシェーナの心を踏みにじることになる。

それでも抑えようのない殺意が湧き上がりかけるのを、瞼を伏せることで堪える。

（こんな者たちのために……）

すでに思考は、人間のものではなくなっている。

神――否、もっと傲慢な心のありようである。唯一にして至高の存在以外はすべて、ファナルシーズのなかでは一切の価値を持たない。

だが、だからこそこの事態を放置するつもりはなかった。

未だ怒り覚めやらぬ精霊に、ワン・ヤーンへの遣いを命じる。そして、フィオルシェーナの体を抱き上げると、風霊の力を用い、急ぎ屋敷へと戻った。

フィオルシェーナの傷は、ひどいものだった。

しみひとつない肌理の細かい白い肌に、無惨に走る無数の傷――痛ましさに眉宇を顰めながら、彼はそのひとつひとつに掌をかざし、癒すための気を送りこんだ。

柱神としての肉体が持つ治癒力もあり、見る間に血は止まったが、傷が完全に塞がることはなかった。

特に胸部の傷は深く、袈裟懸けに走ったそれは、痕を残すと思われた。

気を濁さぬよう、一切の他事を思考の外に置こうとするが、それでも怒りは抑えきれない――寝台脇に置かれた小机に、こぶしを叩きつけることで自身を落ち着かせるしかなかった。

すべての傷の止血を終えたころ、精霊の知らせを受けた緋属の柱神――ワン・ヤーンが屋敷に駆けつけた。

蒼白な彼女に、精霊たちから聞き出した事情を語り、あとを頼む。

「危急の際とはいえ、わたしに肌を見られたことを知れば、心穏やかではないでしょうから……どうか、夏の御方、貴女が癒したことにしておいてはいただけませんか？」

その頼みに、ワン・ヤーンは一瞬目を瞠ったものの、すぐにうなずいた。

そして、部屋を辞そうとするファナルシーズに問いかけた。
「それで、貴方はどこへいらっしゃるおつもりなの？」
未だ意識を取り戻さないフィオルシェーナのそばから離れるファナルシーズの行動を、訝しんでいるのだ。
彼は振り返り、うっすらと笑って答えた。
「災厄の芽を摘み取りに……幸い、苗床の在処はわかっておりますから」
と――。
背筋が凍りつくような、凄艶な笑顔に、ワン・ヤーンは返す言葉を持たなかった――。

◇　◇　◇

その日――。
アズアーダの首都サリアネナに、『神の声』が響き渡った。
決して大音声ではないそれは、しかしこの街に住むすべての者の耳に届いた。
『マナナークに王たる資格なし』
穏やかですらある声が、王たる者の運命を紡いだ。
『かの者を王と戴きつづける限り、我はアズアーダにいっさいの慈愛をかけることはないだろ

う』

無情の宣言に、恐怖の悲鳴を上げた者が、いったいどれほどいただろう――。

そうして、神の支持を得たと、興奮に瞳を輝かせた者はいかほどいたか。

『時至るまで、【針の森】は閉ざす。何人たりとも立ち入ることは許さぬ』

最後にそう言い置き、身を翻したのは――。

陽光そのもののような豪華な金の髪を持つ、太陽の化身さながらの。

圧倒的な美貌を誇る青年神だったと伝えられる……。

◇　◇　◇

傷つき、痛々しくも包帯の白さに包まれ、寝台に眠るひとを見つめながら、ファナルシーズはじわじわと、心に押し寄せてくる恐怖に震えた。

先ほど目にした圧倒的な力と輝きは、とても忘れられるものではない。

自分以外には『雪姫』と呼ばれる紫属の柱神――第三位という位階を持つ、美しくたおやかでありながら、属性【冬】そのままに、激しい力も併せ持つ女神。

彼女が、感情のほとばしりにまかせて放った雷は、恐らく他に類を見ないほどに激しく威力に溢れたものだった……恐らく、あれを抑え得るのは、今のではないかっての【雷皇】ぐらい

であったろう。
しかし、今の自分にその力はなく、暴走しかけた強烈な力を、彼女は自らの身に引き寄せることで被害を最小に留めることを選んだ。
（あんな……者たちのために……）
彼女が傷ついてまで守る価値など見いだせぬ、塵芥のような輩が相手だというのに……それでも彼女は、傷つけるべき対象を、自らに定めたのだ。
そうして、自らの力によって、彼女が負った――この、軽くはない傷の数々。
それは、恐ろしいひとつの可能性を示唆していた。
自ら揮った力にさえ、これほどに傷つくのだ。これが、フィオルシェーナ以外の柱神の誰かが放った攻撃であったなら……。
考えるだけで、背筋が寒くなる。
柱神は、世界の『空』を支える神の一員――人間にも精霊にも、決して傷つけられることはなく、ただ天寿だけがその命を奪うのだ……と、信じてきたけれど。
それが誤りであったことは、最早ファナルシーズにとっては明白だった。
（柱神は、柱神を傷つけ得る……）
最大でも、世界に百八人しか存在しない御柱の君――。
その稀少な同胞同士が争うことなど、まずあり得ない。

皆、そう思ってきたからこそ、この単純な事実は気づかれることなく見過ごされてきたのだろう。

考えてもみなかった。

自分にとって月の化身である彼女が、何者かに……それが譬え彼女自身の力によるものだとしても、傷つけられることがあろうとは。

柱神には世界と精霊の絶対の加護があり、天寿以外の全てから、守られているのだと……そう信じていた。

だからこそ、ファナルシーズは逸る自身を戒め、待つことに決めたのだ。

思いのままに、フィオルシェーナを抱きしめ、手に入れることは容易かった。

『駄目です』

と、拒みながらも、本気の拒絶は、彼女から感じ取れなかったから。

一度だけ見せられた激しい反応は、彼女が初めて示した嫉妬の情ゆえのもの。

『他の方に触れた手で……わたしに触れないで！』

叫んだ瞬間、自分でも思いもかけないことを口にしたといった顔で愕然としていた。

あの言葉に、自分の心がどれほど歓喜に震えたか、きっと彼女はわかってはいないだろう。

他の方に触れた手で――それはつまり、他の者には触れないで欲しいと願っているということなのだから。

恋着による独占欲だ。

だから――。

焦がれつづけてきた心のまま、奪ってもきっとかまわない――彼女にはそれを受け入れるだけの想いがあると、あの瞬間に確信した。

それでも、急くことをしなかったのは、時は十二分にあると思ったからだった。

彼女と同じ『神』の寿命を手に入れた今、焦る必要はなかった。

ゆっくりと、彼女の心を解けばいいのだ。そうして、心を開いてくれた彼女と、ずっと幸福な時を紡いでいけば……いければ、それでいい。

そのためには、どれほど時間をかけても惜しくはない。

そう――思った。

けれど。

そうではないのだ。

そんな保証はどこにもないのだと、今日という日に突きつけられた。

柱神という『人間を超えた』存在でさえ、無敵ではあり得ない。

目の前で傷つき意識を失っている彼女が、その、何よりの証――。

「結局は……同じというわけか……」

泣き出しそうな顔で、ファナルシーズは眠るフィオルシェーナを見つめた。

包帯に包まれた場所以外にも、小さな傷は至る所についている。
傷だらけの彼女――死んでしまいかねなかった、彼女。
いつ――喪われるかもしれない、彼女。
ぞっとした。
このひとの存在ゆえに、自分は『人間の子』としての生を捨てた。
彼女のせいにするつもりなどない。あくまで自分で決めたことだ。
だが、それは、あくまで彼女という存在がこの世にあってこそ――それなくしては成り立たぬ大前提なのだ。
なのに、今日……知ってしまった。彼女が喪われてしまうかもしれないという可能性を。
ならば――だとしたら。
「わたしはもう……待てはしない」
包帯に包まれたフィオルシェーナの手――その指先に、そっと唇で触れて、ファナルシーズは答えがないことを知りつつ、一方的に宣言した。
「許してください……貴女が次に目覚めた時、わたしは貴女を……奪うでしょう」

◇◇◇

意識を現実に引き戻したのは、全身が訴える痛みだった。
うっすらと瞼を開くと、なぜか目の前にファナルシーズの顔があった。
（なぜ……？）
首を傾げた瞬間、走った痛みと同時に記憶が甦る。
制御できずに暴走させかけた雷撃――消すことも散らすこともできぬそれらは、この身に受けるしかなかった。
そうでなければ、あの場にいた者の命はすべて消え失せていただろう。
（怒りにまかせて、力を揮おうだなんて……）
自分が、あんなに脆いとは思わなかっただけに、衝撃も大きい。
（これは、罰なのだわ）
無事にはすまないとわかりつつ、それでも選んだのは――罪の意識があったからなのかもしれない。
あの瞬間、確かに自分はあの男たちに憎悪を抱き、殺意を覚えたのだ。そうでなくて、どうしてあれほどの力が溢れようか。
殺してしまいたいと、強く思った。
柱神として、好ましからぬ思いを抱いたのは一瞬――けれど、この身に宿る力を解放するには充分すぎる時間だった。

思い出すだけで、恐ろしさに震えそうになる。
自分が持つ力のほどを忘れたつもりはなかったけれど、あまりにも久しく揮っていなかっただけに、過小に認識していたことを思い知らされた。
(あんな、力を……)
他者に向けて放つなど、決して許されることではない。
そう思った瞬間、不安が湧き上がってきた。
「彼らは……あの娘は……っっ!?」
起き上がろうとして、忘れかけていた痛みに襲われ、小さな悲鳴が洩れた。
「月姫っ!」
慌てて、ファナルシーズがそれを押しとどめる。
(どうして彼がここにいるのだろう……? あれからなにがあったというの……?)
わからないことが多すぎて、なにから考えればよいのか、それすらもわからない。
ひとつ、息をついて、フィオルシェーナは青年への頼みを口にした。
「起きたいのです……手を貸していただけますか」
青年は、深い紫の双眸に、苦しげな色をたたえてかぶりを振った。
「無茶はしません、お願いです、起きていろいろと話を聞かせていただきたいのです」
ファナルシーズは気が進まぬ様子だったが、彼女が退かぬことを悟ったのか、ため息まじり

にうなずいた。
「……少しだけですよ」
そう言い、傷に触らぬよう細心の注意を払いながら、彼女が半身を起こすのを手伝ってくれた。
「ありがとう」
礼を口にした途端、思いがけなく近くにあるその顔に、知らずどきりとした。
悟られぬよう、そっと視線を逸らし、包帯に包まれた両手を見つめる。
「わたしが意識を失っている間に、なにが起こったのかをお尋ねしても……？」
包帯を見た瞬間、別のことが気になったけれど、問うのはなぜか躊躇われて、結局最初に覚えた疑問を口にのせた。
こちらの動揺には気づかれずにすんだようで、ファナルシーズは穏やかに目元を和ませた。
「お知りになりたいのは、あの娘のことでしょう？　ワン・ヤーンさまに、保護をお願いしましたから、もう心配はいりません。付け加えるなら、傷の治療もあの方にお願いいたしました……安心なさってください」
違うことなく見抜かれて、それが嬉しくも気恥ずかしい。
「あの男たちも……さすがにお屋敷までは押しかけないでしょう。それどころではなくなるでしょうしね」

ちらりと洩れた、意味深長な呟きに、フィオルシェーナは小首を傾げた。
「それはどういう……？」
意味ですか？
（まさか……？）
一瞬覚えた疑念は、やはりファナルシーズに見抜かれたらしい。
微苦笑を浮かべた青年が、否定の言葉を口にする。
「身柄を確保するために、一時意識は奪いましたが、貴女が考えられるような危害はいっさい加えてはおりませんよ。わたしとしては、八つ裂きにでもしたいところでしたが……」
冗談とは思えない、刃のような口調に、思わず「そんな！」と声が上がる。
「……だから、しておりません。貴女の心を傷つけるような真似は、たとえしたくとも……我慢します」
本意ではありませんが――と続けられた言葉に、フィオルシェーナは自分の行為が、この青年を深く傷つけてしまったことに、今更ながらに気がついた。
幾度拒絶しようとも、愛を囁きつづける彼が、傷ついたこの身を目にして、心を痛めないはずがないのだ。自分に置き換えれば、あまりにもたやすくわかるはずのことに、今まで気づかなかったのは、彼がそれを気取らせなかったからだ。
深い思いが伝わってきて、泣きたいほどの切なさに見舞われた。

（愛しい……）

このひとが、愛しい。

もう、認めるしかなかった。

（それでも、受け入れることはできないけれど……）

残された時がどれほどあるのか、読み取ることはできないが、彼を置いて先に逝くことだけは確かだから。

リアンリードに残して逝く苦しみを味わわせた上に、ファナルシーズに取り残される痛みまで与えたくはない。

（だから、この思いはこの胸のなかだけに――）

そう、彼女が心を決めた時。

不意に鋭い視線を感じたかと思うと、次の瞬間、大きな腕に閉じこめられた。

一瞬、なにが起こったのか理解できず、目を瞠ったフィオルシェーナは、視界に映った頬をくすぐる金の髪に、自分がファナルシーズに抱きしめられていることを知った。

「なにを……!?」

慌てて身をひねり、逃れようとするが、決して強い力をかけられているわけでもない彼の腕を外すことができない。

耳元でささやかれた、かすれた声の紡ぐ言葉に、今度は動きすら封じられる。

「心臓が止まるかと思いました……」
深い痛みを窺わせる響きに、フィオルシェーナは唇を噛みしめる。
「……これまで生きてきて、あれほど恐ろしいと思ったことはありませんでした……」
責める響きはない。
ただ切なげな息が、耳朶に触れて、苦しみを呼ぶ。
「月姫……いいえ、フィオルシェーナ」
初めて、その声が彼女の名を呼んだ。
続いて告げられた内容に、フィオルシェーナは息を呑んだ。
「貴女のそばに来るために、他の方に触れたわたしが許せませんか……？　この指を切り落とせば、貴女は許してくださるでしょうか？」
戯れ言めいた言葉に宿る、本気の意志に、彼女は青ざめた。
（やめて……）
そう言いたいのに、声が出ない。
「それとも、確実に訪れる別離ゆえに、貴女は受け入れてくれないのでしょうか……？」
びくり、と体が震えるのを止めることができなかった。
（まさか……知って……!?）
ゆっくりと、ファナルシーズが彼女の耳元から顔を離した。

覗き込んでくる紫水晶の輝きから、目を逸らすことができない。
「わたしの心は、一度死にました。貴女がこの世界のどこにもいないのだと思った時、確かに心は死んだのです」
綴られる想いの深さに、フィオルシェーナは目眩を覚える。
「春の御方から、貴女が生きていると聞いた瞬間、どれほどの歓喜が胸を埋め尽くしたことか……！　お願いです、フィオルシェーナ……もう一度、この心を殺すようなことはなさらないでください。たとえ別離が約束されていても、幸福な記憶があれば、わたしは生きると誓いますから」
切々と訴えかけられ、どうしていいのかわからなくなる。
そんな彼女の心中を知ってか知らずか、ファナルシーズの両手が頬を包み込み、「それとも」と問いかけた。
「わたしが、お嫌いですか？」
熱のこもったその声に、それでも躊躇いの抜けないフィオルシェーナは、素直に答えることができなかった。
「ら、乱暴な方は嫌いです」
ようやくそう返すと、微かに笑う気配。
「乱暴な真似など、した覚えはありませんが」

「しているではありませんか」
揶揄も露な口調に、かっとなってファナルシーズを睨みつけようとして、恐ろしいほど真摯な光を宿す瞳に言葉を失った。
「本当に、お嫌いですか……？　本気で……？　貴女の言葉を、わたしは信じますよ？」
脅しのような言葉に、「嫌い」だと言いかけたものの、そう信じられた先のことを想像し、恐ろしさに身が竦んだ。
言わなければ、いけないのに――わかっているのに、どうしても声が出ない。
「愛しています、フィオナシェーナ……貴女は？」
やはり答えられない彼女の頬を両手で包み込んだまま、鼻先が触れるほどに、顔を近づけて再度囁かれた。
「貴女の思いを、教えてください」
答えられない――。
しかし、なにより雄弁に、揺れる瞳が答えを告げていた。
その様子に、ファナルシーズがくすりと笑みを零した。
「どうやら貴女の眼差しは、唇以上に心に誠実であるらしい……」
それを答えとして、いただくことにいたしましょう。
強引な断定に、けれど否定する言葉を口にすることもできなかった。

「愛してます」
囁きながら、半ば伏せられた彼女の瞼に、ファナルシーズの唇が落とされる。
「愛してます」
額に、頬に、囁きひとつごとに口づけを落とす。
「愛してます」
最後に触れたのは、彼女の唇――。
二度、三度と、角度を変えて、啄むような口づけが贈られた。
そして、四度目のそれは、深く――熱く。
ようやく離れたその熱が、次に首筋に落とされた時、フィオルシェーナの腕はファナルシーズの背に回されていた……。

◇　◇　◇

髪が違う。
肌が違う。
声が違う。
指の形も、唇のそれも。

仕種も、眼差しも――なにもかもが違う。
けれど。
その声が、その眼差しが、その指先が、その唇が――呼び起こす熱だけは同じだった。
甘く苦しい恋の檻に、フィオルシェーナは再び囚われた――。

終章——針の森

アズアーダに新国王が即位して半年が経つ頃——。

今は閉じられ、神々にしか出入りがかなわなくなった『針の森』の端に佇み、森の奥に視線を投じるひと組の男女の姿があった。

まだ年若いふたりはともに、茶褐色の巻き毛と榛色の瞳をしており、顔立ちもどことなく似通っていた。

兄妹であることが、一目でわかる。

フィオルシェーナに助けを求めるため、一年前、この森を進んだ娘——エセルシノとその兄オルセーズだった。

血を伴う国王の交代劇が終わり、ようやく解放された時、オルセーズはひとりでは立ち上がることができぬほどに衰弱していた。

それがようやく回復し、多少の旅なら大丈夫だと、医師から告げられてすぐに、ふたりはサリアネナを出立した。

直に見えることはかなわなくとも、少しでも近くで、感謝の念を伝えたかったからである。

初めて目にする森の威容に、オルセーズが呆れたような感心したような声を洩らした。

「お前は昔から、思い切りのよいところがあるとは知っていたが、本当に、この森に分け入ったのか……？」

疑うような兄の言葉に、心外だとばかりにエセルシノは頬を膨らませた。

「失礼ね。そのことは、ワン・ヤーンさまも知ってらしたでしょう？　確かに怖くなかったと言えば嘘になるけれど、あの時は必死だったもの……」

兄に始まり両親まで獄に繋がれ、あのままではただ処刑の日を待つしかなかった日々――一縷の希望に縋らなければ、きっと心がおかしくなっていた。

警邏隊員に追い詰められ、心が砕けそうになった時、幻のように現れた、月の化身のような女神――。

その女神を追ってきた太陽の化身。

あのふたりに、自分は命だけでなく心まで救ってもらったのだ。

す、とエセルシノはその場に膝をついた。

オルセーズも同じく膝をつき、両腕を胸の前で交差させた。

「夜空を照らす月のような御方――」

「世界を照らす陽のような御方――」

詠うように、ふたりで誓いを口にする。
「我が生涯、尽きる時まで――」
「この魂、消える時まで――」
ふたりの声が、重なる。
「おふたりへの変わらぬ感謝と敬愛を捧げつづけることを」
ここに誓言いたします――。
深く頭を垂れた後、ふたりは同時に大地に口づけた。

◈　◈　◈

かつて、『針の森』の奥に建つ屋敷において、女主の一日は、朝日とともに始まっていた。
精霊たちに朝の挨拶をし、香草園でまだ露の残る香草を摘み、朝食の後、それらで淹れたお茶を口にするのは、ずっと変わらず続いた日課だ。
しかし、ここ一年ほど、以前とは変わったことがふたつ――。
「貴方という方は……！　放してくださいと、何度言えばわかってくださるのです!?」
寝台から起き上がろうとする彼女を、引き留めるのは長く優雅な青年の腕だ。
「まだ離れずともよいでしょう？　ほら、まだ小鳥の声も聞こえない……」

「すぐに聞こえてきます。ねえ、お願いですから、放してくださいな。貴方のために朝食を作らせてはいただけませんの？」

「朝食なら……」

「それ以上おっしゃるなら、ご自分で用意していただきます。ねえ、聞き分けのないことを言わないで……貴方の好きな薄荷茶を用意してさしあげますから……」

寝台の内と外とで、他愛のない攻防が毎朝繰り広げられるようになったことと。

……屋敷の住人が、ひとりからふたりに増えたことである。

あとがき

初めまして、或いはこんにちは。
前田珠子です。
この度は『空の呪縛　月の堕ちるとき』をお手に取っていただき、ありがとうございます。
さて、メインタイトルからもおわかりかと思いますが、この作品は『空の呪縛』の続編に当たります。
当然、時間の流れを辿る上では、フィオルシェーナとファナルシーズのその後の話――となるはず……というか、つもりだったのですが。
途中まで書いて、突然筆がぴたりと止まり、一歩も進まないという状況に陥ったのです。理由を考えた結果、ヒロインたるフィオルシェーナがどーも、リアンリードの思いを信じ切れていないというか、優しいひとだから突き放せなかったんじゃないかとか、誤解してるらしいのがネックだと判明し、ではリアンリードもしっかり彼女に本気だったことがわかる話を立ち上げよう、と思ったわけであります。

そんなわけで、今回当初の予定にはなかったリアンリードとフィオルシェーナの過去を、友人であるエン・リュウから見た話として『譲り葉の恋』を書きました。

とは言っても、これは実は『恋獄の緒』のすぐあとに持ってくるつもりのエピソードで、実際のところ、プロローグは書いて放置状態にあった話だったりします。

放置した理由は簡単。

「生まれつきの魔性だとか人外なヒトなら、何千年生きていようと関係なく描けるけど、人間に生まれて人間として途中まで育って、でもって違う存在に生まれ変わって、その上で千年生きたヒトの考えることなんか想像つかない」

というもの。

魔性やら人外は、快楽主義者って頭があるのか……でも別に人外全員刹那主義というわけでもないと思うけれど……やっぱり、もともと人間というのが、ネックになっていた模様。

しかし、解明されないことには先に進めないという事態も生じるもので……結局、フィオルシェーナは誤解しているようだけれど、実はリアンリードもしっかりきっぱり彼女を愛して執着していて両思いだったことを明らかにするために、書き上げることとなりました。

でも、語り手役に選ばれたエン・リュウさんには、ちょっと気の毒だったかも。

担当さんに、「もしかして、エン・リュウさんはフィオルシェーナのことを憎からず思っていたんですか?」と尋ねられた時、即答できなかったのも、「でも、儀式の祭主に指名された

ら、きっと拒まなかっただろうなー」とか思ったりしたからで。

けれど、エン・リュウにしてもリアンリードにしても、恐らくこの先回想シーン以外で登場することはないでしょう（オーランガーダは色っぽくて格好いいだけに惜しまれますが）。で。

フィオルシェーナとファナルシーズの未来形――というか、現状の物語である『月の堕ちるとき』。

コンセプトはずばり、サブタイトルそのものです。

前回のラストで、堕ちたかに見えたが、結局ぎりぎりのところで踏みとどまったフィオルシェーナを今度こそ（恋に）堕とそう――！

という……。

いや、予定では『月を、恋う』のラスト時点で堕ちてもらってるはずだったんですが……一部から寄せられた『ラブラブになるんですよ……ね？』との懐疑的なご意見に、もうなっているというか、させているつもりだったのに、そうは受け止められなかった自分の表現力不足に恥じ入るしかないというか……。

とにかく、きっちり両思いになってもらおうと書き始めた時に決めたのが、『天然でかわさないこと』でした。

ファナルシーズにはちゃんと口説かせること、フィオルシェーナはちゃんと口説かれるこ

と。かわしたりぼけたりはなし、と。

決めたのはいいものの、これが結構わたし的には難しいことが判明し、苦しむことになりました。

いや、口説くほうは、王道でいけばいいのですが、どうしたら陥落する気皆無なフィオルシェーナをその気にさせられるのか、と。

ラブは難しいと、改めて痛感させられました。頑張りましたけど。

その甲斐があったのかどうかの判断は、皆様に委ねます。

さて、今回書くにあたって、決めたことがもうひとつありました。

それは、一見白く見える元『光の皇子』さまが、実はかなり黒いことを明らかにする、ということです。

シーンがひとつ終わるごとに、担当さんに『またしても黒ファナル降臨ならず』とか『次こそは黒ファナルの降臨を』とかメールで送っていたもので、最後のほうでは『わたしはひたすら黒ファナルの降臨の儀式を続けます』との応援メールをいただくほどになりました。

結果としては……ちょこっと降臨？

なかなか本性を見せようとしてくれない、食えないひとです。でも、これ以降黒さもちらほらと出てくる予定なので、皆様の反応が楽しみなような不安なような……。

まあ、想いが通じて甘々生活のなかでは、顔を出すことはないかもしれませんが。さてさ

て、どうなることやら……。

以前と違い、最近は執筆中にBGMをかけることがなくなったのですが、今回は脳内が勝手にBGMをかけてくれました。

何がきっかけなのやら、『月の堕ちるとき』を書き始めて間もなく、頭の中である曲がエンドレス状態で流れ始めたのです。

その曲とは、山口百恵の『イミテーションゴールド』――なぜ『イミテーションゴールド』なのか、自分でもわかりませんが、ひとときも途絶えることなく、彼女の歌声が脳内再生され続けました。

ふっと得心がいったのは、最後近くになってから。

原因はメロディではなく歌詞にあったようです。

自分でも無意識に、フィオルシェーナのテーマに選んでいたみたいです。

どこが、と聞かれると答えに困りますが……まあ、なんとなく？

今回、久しぶりにたっぷりあとがきのページをいただいたので、近況など。

家庭菜園を始めました。

といっても、猫の額ほどしかない面積ですが（笑）。

植えたのはニンニクとネギとほうれん草。

種から植えたネギの芽は、髪の毛のように細くて、見つけるのに難儀します。もう少し育っ

たら移植の予定ですが、それまで雑草に負けずにいてくれるか、少々心配です。

ニンニクは種ニンニクで。普通スーパー等で売っているものは、発芽しないよう処理してあるのだと母から教えられて目から鱗でした。ほうれん草の種は一晩水につけてから蒔くと、発芽率がいいのだとかも。

日に日に伸びていく芽を観察するのは楽しいです。

花を育てる時も同じことが言えて、何日目で芽がいくつ出たとか、何日目で本葉が出たとか。花の場合、蕾ができた、咲いた——とつづく楽しみは、野菜についてはもっと食欲に根ざした直接的なものになりますね。

まだ本葉が出たばかりのほうれん草を眺めながら、あとどれくらい育ったら食べられるかなぁ、と気の早いことを考えることしきりです。

お浸しに、味噌汁に、ソテーに……等々、あれもこれもと考えながら、ふと気づく現実に苦笑したりして。だって、猫の額なのに——と。

まさに、取らぬ狸の皮算用（笑）。

しかし、食欲にばかり傾くのも自分としてはどうかと思うので、無事に春に収穫できたら（ほうれん草は冬だけど）、今度は花も植えてみようと思っております。

もっとも、かつてサボテンすら枯らした前科のあるわたしに、果たして無事に育てられるのか、少し不安ですが……冬の間に、丈夫で育てやすくて目にも楽しい花がなにかないか、調べ

ようかと思います。

ああぁ、まだページが埋まらない……。

取りあえず、これからの執筆予定などを（ただし、予定は未定と捉えておいてください）。

次は『天を支える者』の本編を予定してます。

何色の柱神さまを探すことになるのか、まだ未定なので仮に『第二部』と。

ナルレイシアがロスタロイドから出る予定です。国境越えるかどうかは、これまた今のところ未定ですが、シリーズ中必ず国外には出ることになるでしょう。

一冊では終わらないことだけがわかってますが、なるべく一息に進めたいと思っております……が、もしかしたら、途中でちらっと、放り出したままの話を出すかもしれません。

全然予告になってませんね、すみません。このあとがきが終わったらプロットに取りかかる予定なので……。

なるべくあとがきに、予告を出すように心がけますので、そちらをチェックしていただけるとありがたいです。

そろそろ結びとまいりましょう。

今回も、挿絵の明咲トウルさまと関係者の方々に、大変お世話になりました。この場をお借りして、お礼申し上げます。

今回、わたしなりにラブ度を上げるべく頑張ったつもりですが、如何でしたでしょう……？

読んでくださった方には、是非感想を聞かせていただきたいです。でも『もっと頑張りましょう』まではともかく、『全然ダメダメです』は勘弁してください（笑）。

それでは、またお会いできることを願って――。

平成十九年　秋

前田　珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



空の呪縛
月の堕ちるとき

COBALT-SERIES

2007年12月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

著者　前田珠子
発行者　礒田憲治
発行所　株式会社集英社

〒101−8050
東京都千代田区一ツ橋2−5−10
(3230) 6268 (編集部)
電話　東京 (3230) 6393 (販売部)
(3230) 6080 (読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2007　Printed in Japan
本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。
送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。

ISBN978-4-08-601101-3 C0193

〈好評発売中〉 コバルト文庫

身も心も灼きつくした罪深き恋。
だから、二度と誰も愛さない――。

空の呪縛（くう）

前田珠子
イラスト／明咲トウル



『針の森』の屋敷にたったひとりで暮らしている美しく聡明な女柱神。数多くある恋の誘いを頑なに断り続ける理由。それは、過去の悲しい過ちを繰り返さないためだった――。

〈好評発売中〉
コバルト文庫

選ばれし子供たちが、世界を守る。
前田珠子〈聖石の使徒〉シリーズ
イラスト／山本鳥尾

聖石の使徒
其は焔をまとう者
聖石の使徒
其は力を放つ者
聖石の使徒
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
聖石の使徒
揺籃の瞳
聖石の使徒
蒼の組木箱
聖石の使徒
狩人の爪





〈好評発売中〉 コバルト文庫

本好き少女の波乱万丈ファンタジー！

前田珠子 〈天を支える者〉シリーズ

イラスト／明咲トウル

天を支える者

天を支える者2

天を支える者3

天を支える者4

天を支える者 古懇唄

天を支える者 古懇唄2

天を支える者 古懇唄3

天を支える者 古懇唄4

天を支える者 古懇唄5

天を支える者 罠は、蜜の味



〈好評発売中〉 コバルト文庫

美少年コンビが暗躍する魔性を斬る!

前田珠子 〈魅魍暗躍譚〉シリーズ

イラスト／田村由美

魅魍暗躍譚

碧眼の少年(前編)(後編)

髪と瞳の色を奪った魔性を探す甲斐。途中、行き倒れの志摩を助けたことから、没落した名家の当主・隠岐と知り合って!?



月乃守家の姫君・遠江(とおとうみ)は美少女だが相当の猫かぶり。偶然異母兄の甲斐と再会を果たすが、魔性の陰謀が彼女に迫り…!?

魅魍暗躍譚

月読見の乙女(前編)(後編)

〈好評発売中〉 コバルト文庫

選ばれし少女よ、魔性に立ち向かえ!

前田珠子 〈破妖の剣〉シリーズ

イラスト／廈門 潤



漆黒の魔性

白焔の罠

柘榴の影

紫紺の糸(前編)(後編)

翡翠の夢1~5

鬱金の暁闇1~3

女妖の街 破妖の剣 外伝①

ささやきの行方 破妖の剣 外伝②

忘れえぬ夏 破妖の剣 外伝③

時の螺旋 破妖の剣 外伝④

魂が、引きよせる 破妖の剣 外伝⑤

呼ぶ声が聞こえる 破妖の剣 外伝⑥

〈好評発売中〉 コバルト文庫

ついに時は満ち、運命が動き出す！

風の王国

金の鈴

毛利志生子
イラスト／増田メグミ



ラセルの家出。明かされるリジムと前妻の真実。翠蘭は出産の時を迎えようとしていた。一方、リジムはケレスからある提案を受けて…。

〈風の王国〉シリーズ・好評既刊

風の王国
風の王国 天の玉座
風の王国 女王の谷
風の王国 竜の棲む淵
風の王国 月神の爪
風の王国 河辺情話
風の王国 朱玉翠華伝
風の王国 目容の毒
風の王国 臥虎の森
風の王国 花陰の鳥
風の王国 波斯の姫君
風の王国 初冬の宴

〈好評発売中〉 コバルト文庫

ここがふたりの、かえる場所。

緑のアルダ
約束の地

榎木洋子
イラスト／唯月　一



守龍を連れ帰り、故郷の東の果て半島に共に戻ったアルダ・ココとウルファ。旅を終えた仲間の、「それから」の物語が綴られる——。

緑のアルダ シリーズ・好評既刊

石占の娘
荒れ野の星
千年の隠者
謀略の都
虹の白夜
旅立ちの丘
蒼い雪原
熱砂の宮殿
水あふるる都
龍の島
〈第二部〜守龍編〜〉
導きの泉
緋のウルファ 白のラダ
占い師の宿命
龍の歌

〈好評発売中〉 コバルト文庫

深まる謎にひと筋の光が射す！

シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―

燃える湖底のラム（後編）

桑原水菜
イラスト／夢花李



古代の超騎士が北の聖地に残した伝言をもとに、レディ・ラムを捜す奏とケヴァン。アースガルズを開く石版の在処はわかるのか…？

―〈シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―〉シリーズ・好評既刊―

シュバルツ・ヘルツ―黒い心臓―
ワルキューレの雪騎行
アリアドネの糸車
シヴァの踊る森
燃える湖底のラム（前編）
シュバルツ・ヘルツ ゲスタァン

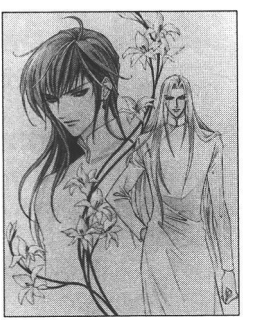
〈好評発売中〉 コバルト文庫

花路（ホワルー）。散るならば、それまでの花…。

白き花咲く龍の島

真堂　樹

イラスト／浅見　侑



白龍（バイロン）市に新たな色街が。物騒な噂も多く、花路（ホワルー）の頭・飛（フェイ）は男娼として潜入する！　一方、嵐を望む『白龍』マクシミリアンの思惑は!?

〈四龍島〉シリーズ・好評既刊

龍は微睡（まどろ）む

龍は薫風（くんぷう）に翔（かけ）る

龍は花を喰らう

花鬼幻燈（かきげんとう）

他28冊好評発売中

〈好評発売中〉 コバルト文庫

運命は、私の想いをあざ笑う。

天空の瞳

ランスレーゲの陰謀と荊の恋

橘香いくの

イラスト／横馬場リョウ



オレグを想ってついた嘘が原因で、彼を失ったルシア。弟を救い、もう一度オレグに会うため、金髪を切り、男装して旅に出たが…。

〈天空の瞳〉シリーズ・好評既刊

天空の瞳 ウォルドの婚礼と時の封印

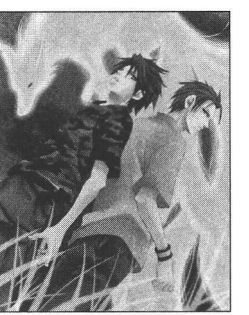
天空の瞳 エルスタッドの祝祭と裏切りの密約

〈好評発売中〉 コバルト文庫

伝説の名刀をかけ、鉄鼠と大勝負!

1/2のヒーロー
九尾の巻

七穂美也子
イラスト／片山　愁



安倍晴明の依頼で伏見稲荷までやってきた聖たち。鷹矢の欲しがる名刀・小狐丸を手に入れるため、九尾・天狐の願いを聞くことに…。

〈1/2のヒーロー〉シリーズ・好評既刊

1/2のヒーロー
1/2のヒーロー 竜神の巻
1/2のヒーロー 土蜘蛛の巻
1/2のヒーロー 大百足の巻
1/2のヒーロー 鵺の巻

〈好評発売中〉 コバルト文庫

謎の盗賊団の
次なる獲物は王女さま!?

今夜きみを奪いに参上!

ー紅(あか)の宝玉ー

響野夏菜
イラスト／本田たまのすけ



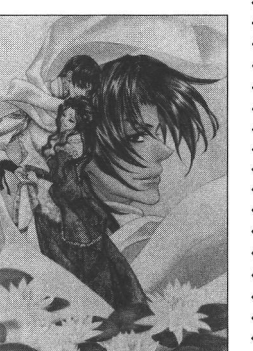
狙った獲物は逃がさない、という謎の盗賊団〈空の旅団〉から盗みの予告状がファロン城に届けられた！　王女のイリーシェは興味津々。予告時間の深夜に寝室を抜け出したけど…？

〈好評発売中〉 コバルト文庫

侯爵家の御曹司の命が狙われた！
影武者は、自分ソックリの死神!?

オークホールの白騎士

崎谷真琴
イラスト／羽原よしかづ



コーダ・オークホールは先祖の白騎士を敬愛する御曹司。ある日、先祖を祀る聖堂で自分にソックリな男に出会い、影武者となってもらうが、その男は自称「死神」を名乗り…？



退屈ぎらいの超セレブ
高校生集団が繰り
広げる、痛快サスペンス
アクションが、
ついに登場!

無敵の6人組が
今日も大暴走!!

有閑倶楽部

名作コミック『有閑倶楽部』を完全小説化(ノベライズ)!!

コバルト文庫 下川香苗 原作 一条ゆかり

有閑倶楽部

史上最大の誘拐

あの剣菱悠理(けんびしゆうり)がさらわれた!?



悠理はある日、
退屈しのぎに誘拐犯に
ついていくことに。
しかし、犯人の要求額が
少ないと怒りだして…?

コバルト文庫 雑誌Cobalt

「ノベル大賞」「ロマン大賞」

募集中!

集英社コバルト文庫、雑誌Cobalt編集部では、エンターテインメント小説の新しい書き手の方々のために、広く門を開いています。中編部門で新人賞の性格もある「ノベル大賞」、長編部門ですぐ出版にもむすびつく「ロマン大賞」。ともに、コバルトの読者を対象とする小説作品であれば、特にジャンルは問いません。あなたも、自分の才能をこの賞で開花させ、ベストセラー作家の仲間入りを目指してみませんか!

〈大賞入選作〉
正賞の楯と副賞100万円(税込)

〈佳作入選作〉
正賞の楯と副賞50万円(税込)

ノベル大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙95～105枚。
【締切】 毎年7月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢は問いませんが、新人に限ります。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt12月号誌上(および12月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作も同誌上に掲載。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ノベル大賞」係
※なお、ノベル大賞の最終候補作は、読者審査員の審査によって選ばれる「ノベル大賞・読者大賞」(大賞入選作は正賞の楯と副賞50万円)の対象になります。

ロマン大賞

【応募原稿枚数】 400字詰め縦書き原稿用紙250～350枚。
【締切】 毎年1月10日(当日消印有効)
【応募資格】 男女・年齢・プロ・アマを問いません。
【入選発表】 締切後の隔月刊誌Cobalt8月号誌上(および8月刊の文庫のチラシ誌上)。大賞入選作はコバルト文庫で出版(その際には、集英社の規定に基づき、印税をお支払いいたします)。
【原稿宛先】 〒101-8050 東京都千代田区一ツ橋2－5－10(株)集英社
コバルト編集部「ロマン大賞」係

★応募に関するくわしい要項は隔月刊誌Cobalt(1月、3月、5月、7月、9月、11月の18日発売)をごらんください。

9784086011013

ISBN978-4-08-601101-3

C0193 ¥438E

1920193004380

定価 本体438円＋税



コバルト文庫